

2022 年度事業報告書

NPO 法人アーツセンターあきた

1. 事業の実績・成果

(1) 総括

秋田公立美術大学(以下、「秋美」という。)の社会連携事業と秋田市文化創造館の指定管理事業を、2つの事業の柱として遂行した。

秋美社会連携事業については、多くの事業が開始から5年目を迎え、仕組みの改善が進み、運営面においては安定化してきている。開館2年目となる秋田市文化創造館は、引き続き施設の維持管理と貸出において仕組みの改善・更新を要しているが、隣接するあきた芸術劇場のグランドオープンに伴う一帯の人の往来の増加や、市民が気軽に挑戦できる企画「カタルバー(1日店主)」の開始などを通じ、来館者数、施設利用者数が大幅に増加するとともに、館が目指す市民の主体的な事業への参画につながる事例も増えている。

(2) 秋田公立美術大学社会連携事業

秋美の研究・教育成果を地域とつなぐ社会連携事業と、大学広報事業の企画・制作を受託し、遂行した。

① 広報

秋美のブランドイメージの発信や、秋美の研究・教育成果へのアクセスを促すための展覧会や公募事業「何でも、アリ。高校生 Creative Award」、大学パンフレットなどの印刷物を企画・制作した。公募事業「何でも、アリ。高校生 Creative Award」については、前年度に比して応募件数は微減したものの、応募者の居住地が海外にも広がりを見せた。また昨年度の入賞者が有志でPR動画の制作を申し出る等、着実に本事業への共感が広まっている実感をもっている。

② 教育(人材育成)

担い手の掘起しと育成を目的に、小学生や中高生を対象としたアートスクールの企画・制作、秋美の在学生を中心に展覧会制作を実践的に学ぶための事業「BIYONG SELECTION」を運営した。特に、中高生を対象としたアートスクールは引き続き高いニーズがあり、各回定員を超える申し込みを得た。

③ 地域連携

秋美と地域をつなぐ受託事業・受託研究のニーズやシーズを開拓するための、調査活動や相談対応を行った。能代市やにかほ市を中心に、美術大学ならではの専門性を活かした事業実績の蓄積を着実に進めている。また、新規案件の掘起しにも積極的に取り組んだ。

④ 受託事業・受託研究

受託事業・受託研究を年間10件実施し、19件の相談に対応した。

⑤ 施設管理

秋田公立美術大学の関連施設であるアトリエももさだ、サテライトセンター、ギャラリー「BIYONG POINT」の施設管理、貸館に係る業務を担った。

(3) 秋田市文化創造館指定管理事業

① 施設管理

来館者数や利用登録者数など、前年度から大幅に増加。施設の利用申し込み件数は年間 701 件と、前年度の 355%を達成し、新規およびリピーター双方に施設利用が増えている。

多用途に施設が利用される中で、来館者の安全管理を図るための施設・什器の整備、機材の整理進めるとともに、施設利用者に対してもきめ細やかなサポートを行ったことにより、利用者の満足度は 98%が「満足」または「やや満足」を示しており、結果としてリピーターの順調な増加につながっている。

② 指定管理事業

アーティストやクリエイターの滞在制作に参加したり、専門家による講演を聞いたり、ワークショップに参加したり、自らやってみたいことにチャレンジしたりと、市民がさまざまに関わることのできる仕組み・事業を企画、実施した。事業への参加がきっかけとなって、施設の利用も生まれ、事業と施設管理の間で良い相乗効果を生みだしている。

また、昨年度からの課題であった広報については、特に SNS についてスタッフの業務分担を見直すことにより、定期的な情報発信に務め、多様な館の姿をアーカイブすることができた。

(4) その他事業

秋田市から「秋田市文化創造プロジェクト・フォローアップ事業(PARーいきるとつくるのにわ)」を受託し、企画・制作した他、自主事業として秋美卒業生を個展形式で特集する展覧会シリーズの図録制作に着手した。また、次年度予定している秋美の開学 10 周年記念展の関連イベントの企画と下準備を進めた。

2. 事業の実施に関する事項

別紙のとおり

以上

2022年度 事業報告書(概要・実績等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	事業期間(開始)	～	事業期間(終了)	主たる会場	事業概要	目的	目標	協力教員	協力者・機関	参加者数(総数)	報道件数	PR実績(配信数)	ウェブ実績(掲載数)	SNS実績(投稿数)
① 地域団体と連携した芸術活動の推進に関する事業	大学受託	地域連携	ドンパン娘シンボルキャラクター・ロゴ作成事業	-	2022/5/1	～	2023/3/31	大仙市、秋田公立美術大学等	ドンパン娘をモチーフとしたキャラクターとロゴマークを作成。現地での調査を重ねながら、イベントや地域特産品に活用していきけるような仕様にすることで、今後のドンパン節の振興と広報活動へと展開していく。	大仙市に伝わる民謡「ドンパン節」の普及活動を目的とした団体「ドンパン娘」のブランディング事業。	ドンパン娘をモチーフとしたキャラクター(2種)とロゴマークの作成。自治体とドンパン節管理団体と協働し、地域に長く愛されるシンボルを作成する。	石川昌	大仙市	500	1		2	2
	大学受託	地域連携	にかほ市・秋田公立美術大学協働事業「ジオカルチャー研究プロジェクト」	-	2022/4/1	～	2023/3/31	にかほ市	教員・助手・学生などによる「ジオカルチャー」を主題にした複数の研究チームを立ち上げ、にかほ市内を主とする調査・研究を行う。調査・研究の過程は紙面等にまとめて市民を対象に配布し、本研究の発信と研究成果の共有を実施する。 ----- (計画時)3年間の継続的な研究として2～3つの研究課題を設定し、研究担当者を中心に他大学や他研究施設、企業などとの連携を図りながら調査研究に取り組む。調査研究はその経過を冊子等にまとめ、広く社会に共有する。	にかほ市と秋田公立美術大学が連携協定を締結したことを受け、令和3年度に、にかほ市・秋田公立美術大学協働プロジェクト「にかほ市リサーチ」を実施し、調査の様子や成果を冊子『にかほ市リサーチ2021』にまとめた。にかほ市内や周辺地域の調査・比較を経て、にかほ市の全体的な特徴を掴んでいく中で本プロジェクトは、「大地・生態系・人間」の三つの存在区分を総合する新しい概念として「ジオカルチャー・ツーリズム」というビジョンを掲げ、環境としてのジオス(地球)とこれまでに培われてきたカルチャー(文化)のつながりを研究するプロジェクトとして立ち上げる。自然・ひと・街・歴史・文化・生業などに通底する特性について研究を深めるだけでなく、にかほ市の未来へとつないでいく資源発掘、可能性の発見を目的とする。 ----- (計画時)にかほ市のひと・街・歴史・文化・生業などの、にかほ市が持つ文化的特性とそれらを形成してきた地勢、地形、地質などの自然を総合的に捉え、にかほ市におけるジオカルチャー研究を立ち上げることを目的とし、複数の調査研究に取り組む。	新たな観点による地域資源の発見や活用可能性をもたらすための基礎的な調査研究を、行政と大学との協働を通じて継続することで地域の可能性を高める	萩原健一、石倉敏明、井上宗則	にかほ市企画調整部総合政策課	98	秋田魁新報(11/20)		597(1/29)	
	大学受託	指定管理	ビヨンスケープ	-	2022/4/1	～	2023/2/28	秋田ケーブルテレビ	秋田ケーブルテレビと秋田公立美術大学の連携協定を踏まえ、秋田ケーブルテレビ本社社屋の外構においてアートプロジェクトを実施する。	(受託事業全体の目的)秋田公立美術大学の多様な専門性を地域のニーズとマッチングし、課題解決や付加価値の創出を後押しする。		今中隆介、井上宗則	秋田ケーブルテレビ					
	大学受託	地域連携	大森山アートプロジェクト	-	2022/1/28	～	2023/3/31	大森山公園・秋田公立美術大学	大森山動物園および大森山公園の歴史・文化・環境・動植物の生態・コンテンツなどの調査・研究を通して資源の利活用を検討し、作品展示やイベント等を企画・制作する。また、事業の魅力伝える記事を作成し、ウェブサイトやSNS、プレスリリース等を活用した発信を実施する。	大森山動物園および大森山公園の資源を用い、秋田公立美術大学のアート、デザインの力を発揮した作品制作やイベント等の実施により、自然・環境・動物などについて気づきや学びを得る機会を創出することで、大森山動物園および大森山公園の学びの場としての価値向上を目的とする。			大森山動物園(担当者:大森山動物園企画広報担当・金大咲)	来場者数98 (オープンニングイベントの参加者およびマップの減り数より) プロジェクトメンバー16(在学生15、卒業)	秋田魁新報(記事掲載:2022/8/13)	645(1/29)	27	
	単独受託		文化創造プロジェクト	-	2022/4/29	～	2023/3/24	秋田市文化創造館ほか	「秋田で食を考える」をテーマに、環境問題、経済、教育、福祉など様々な分野の機関と連携し、ワークショップやトーク等の市民の興味関心をもとにした企画を実施するほか、県内外から専門家を招聘し、新たな視点や創造力を刺激する機会を創出する。	秋田市が主催する「文化創造プロジェクト」(令和7年度まで継続予定)のフォローアップ事業としての企画を実施し、同プロジェクトの方向性を提示するとともに、運営面における課題やベストプラクティスを秋田市と共有しながら、令和6年度の事業計画を作成する。 ※契約書の目的:リーディング事業として実施した展覧会「200年をたがやす」の実績等を踏まえ、市民が主体性を発揮しながら文化芸術に触れる機会の創出、新たな活動が生まれる機運の醸成を図るためのプロジェクトの企画、および令和5年度以降に実施する地域連携企画の立案、調整、プレ企画、情報発信等を行う。			【教育機関】秋田大学、秋田県立大学、秋田公立美術大学、聖霊女子短期大学、国学院高等学校、国際教養大学、ほか 【文化施設】デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)、青森県立美術館ほか 【企業、店舗】ハラッパアフトースクール、JA秋田なまはげ農業協同組	2315	15	4	30	Instagram:75 ストーリー:191
大学受託	地域連携	選手村ビレッジプラザ提供木材後利用事業	選手村ビレッジプラザ	選手村ビレッジプラザ・ハード	2022/4/1	～	2023/3/10	ニプロハチ公ドーム「パークセンター」	選手村ビレッジプラザ提供木材を活用し、ニプロハチ公ドームパークセンター内に新設する「こどもの遊び場」に設置する什器・遊具のデザイン・制作を実施する。	選手村ビレッジプラザ提供木材について、市内公共施設(子どもの遊び場・仮称)へ設置する木育資材等製作を行い、市民や施設利用者へ地域材利用のPRを図るとともに、市の木育推進に寄与することを目的とする。	本事業に取組む大館市林政課やこども課の担当者が今回の協働を通じて「デザイン」の役割や可能性を学び、次の取組みにつなげる端緒を開く。	今中隆介	ORAEアキタファニチャー(有限会社萩原製作所・株式会社東北パネル・藤島木材工業株式会社・HOLTO・fuuuukei)、(委	57	3	1	2	0

2022年度 事業報告書(概要・実績等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	事業期間(開始)	～	事業期間(終了)	主たる会場	事業概要	目的	目標	協力教員	協力者・機関	参加者数(総数)	報道件数	PR実績(配信数)	ウェブ実績(掲載数)	SNS実績(投稿数)
				選手村ビレッジプラザ・ソフト	2022/4/1	～	2023/3/10	秋田県立比内支援学校(大館市)	選手村ビレッジプラザ提供木材を活用し、秋田県立比内特別支援学校(大館市)の生徒を対象にした木工ワークショップを企画・運営する。	選手村ビレッジプラザ提供木材の活用による市内教育機関等を対象としたワークショップを開催し、森林や木材への理解を醸成することを目的とする。	本事業に取組む大館市林政課や子ども課の担当者が今回の協働を通じて“デザイン”の役割や可能性を学び、次の取組みにつなげる端緒を開く。	藤浩志	大館市(委託元)・比内支援学校(大館市)	53			1(3/30)	
② 地域産業と連携した産業創出や芸術を通じた技術支援を行う事業	大学受託	地域連携	能代北高跡地利活用可能性検討業務	-	2022/4/1	～	2023/3/31	能代市	令和3年度検討業務の成果を踏まえ、北高跡地を会場とした実践型ワークショップを立案・実施し、ワークショップの概要やその成果等を多様な手法を用いて広報する。 ―― (計画時)能代市民を中心とした市民参加のワークショップを開催し、北高跡地や中心市街地、能代市について学びながら、北高跡地の利活用の可能性を実証していくための実験的プロジェクトを企画する。ワークショップでの検討、記録として詳細を残し、意見、アイデア等を蓄積する。また、記録を活用して本事業の広報物を作成する。	「令和3年度能代北高跡地利活用可能性検討業務(以下、令和3年度検討業務)」において、実施したワークショップで提示された利活用のアイデアを基にした5つの実証実験プロジェクト案などの成果を踏まえ、北高跡地を会場とした実践型ワークショップを立案・実施し、北高跡地の利活用の可能性を実証的に検証することを目的とする。 ―― (計画時)能代北高跡地の将来的な利活用に備え、利活用の方法や可能性を検証していくための実証実験を行うにあたり、市民とともにその内容の検討を行うことを目的とする。		小杉先生・井上先生・船山助手	能代市	48	北羽新報1(11/13) 魁新報2(9/4、11/21) ABS秋田放送(3/14放送)	2	423(1/29)	46
	秋田公立美術大学	地域連携	地域連携	-	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田県内	*予算330万円(税込)部内通過済み・議 秋田公立美術大学の多様な専門性とマッチングし、課題解決や付加価値の創出を後押しする事業の企画制作に向けた「シーズ」の調査・収集を行う。	秋田公立美術大学の多様な専門性とマッチングし、課題解決や付加価値の創出を後押しする事業の企画制作に向けた「シーズ」の調査・収集を行う。	秋田公立美術大学の教員・学生らとのマッチングの可能性が「シーズ」をどれだけ発掘し、受託事業や共同研究等につなげることができたか。							
	大学受託	地域連携	能代街なか資源再活用プログラム開発研究	-	2022/2/1	～	2023/3/20	能代市	(1) 能代市の中心市街地にある空き店舗・空き家・空きスペースなどを用いた学びの場や学びの機会づくりについて、能代の歴史・文化・資源・人材・技術などを活かした実証実験を計画し、実施する。 (2) 空き店舗を活用した再生エネルギーに関する情報発信拠点について、地域と共存した在り方、地域活性化への活かし方、他の市街地活性化の取組との有機的なつながり方について検討を行い、実証実験を計画し、実施する。	能代市中心市街地の空き店舗・空き家・空きスペースを、これからの地域活動を活性化する資源として捉え、実証実験を通じた研究によってその活用可能性を探る。	日常的な高校生の利用を促進し、市街地のフリースペースに対する要求・要望を調査する。	小杉先生、井上先生、船山助手、石田助手	合同会社能代八峰沖洋上風力(関谷努力:JRE)、ミナトファニチャー(湊哲一)	159	1	2	47	
	大学受託	地域連携	新屋歩道橋色彩計画	-	2022/2/9	～	2022/9/30	秋田公立美術大学、新屋横断歩道橋	塗装デザインおよび塗装色検討方法についての設計	全国的に撤去傾向にある歩道橋だが、秋田市新屋地区の「新屋歩道橋」は付近の小中学校の通学や公園の撮影スポットとして地域住民に親しまれている。新屋地域のランドマークとして歩道橋がどのような存在であるべきか考え、地域住民の地域への愛着を育むため、歩道橋の補修に合わせ、色彩計画を地域の人々とともに実施するためのデザイン制作を目的とする。	地域住民が本事業に関わり、地域への愛着が生まれるような新屋歩道橋の色彩デザインを制作する。	柚木恵介	秋田地域振興局建設部・アジア航測株式会社	20人	3	1	1	
③ 秋田公立美術大学が関わる芸術活動等の情報発信に関する事業	秋田公立美術大学	教育	BIYONG POINT	BIYONG POINT 共通	2022/4/1	～	2023/3/31	BIYONG POINT	秋田ケーブルテレビ(CNA)社屋にあるギャラリースペース「BIYONG POINT」において、年間3本程度の展覧会等を企画運営。なお、立地上、即座に多くの集客は見込めないことから、ウェブや印刷物を通じた情報発信の強化を図る。	教育・研究機関である美術大学が有するギャラリーとして、「現代美術の発信」、「複合芸術の実践」、「人材育成のプラットフォーム」という2018年度にワーキンググループで作成した方針の実践を進める。	「現代美術の発信」、「複合芸術の実践」、「人材育成のプラットフォーム」を実践する学内の事案を掘起し、秋田公立美術大学関係の利用を積極的に促す。				3(2/17)	7(2/17)	9(1/29)	26(3/31)
				早坂葉・後藤那月「めぐりに渗む」	2022/2/18	～	2022/4/10	BIYONG POINT	2021年度BIYONG POINT企画公募採択。早坂葉が代表を務めるコレクティブチームNOWHEREによる展示。人間と生物の境界を探るインスタレーション作品を展開する。	教育・研究機関である美術大学が有するギャラリーとして、「現代美術の発信」、「複合芸術の実践」、「人材育成のプラットフォーム」という2018年度にワーキンググループで作成した方針の実践を進める。	各展覧会について、告知のみならず、開催報告及び展覧会レビューをウェブ、SNSに掲載し、方針及び実践内容の周知を図る。(2020年度目標)							
				「例えば(天気の話をするように痛みについて話せば)展	2022/4/29	～	2022/7/3	BIYONG POINT	2021年度BIYONG POINT企画公募採択。岩瀬海が代表を務めるコレクティブチームTRUNKによる展示。「自身の内に潜む加害性を自覚することは可能か?」というテーマをもとにジェンダーとボンポイントの前身である「秋田小児療育センター」を参照しながら作品を構成します。	教育・研究機関である美術大学が有するギャラリーとして、「現代美術の発信」、「複合芸術の実践」、「人材育成のプラットフォーム」という2018年度にワーキンググループで作成した方針の実践を進める。	各展覧会について、告知のみならず、開催報告及び展覧会レビューをウェブ、SNSに掲載し、方針及び実践内容の周知を図る。(2020年度目標)			3	1	7	10	
				菅原果歩個展「分け入る森」	2022/9/25	～	2022/12/4	BIYONG POINT	卒展2022で出品された作品を軸とした展示を行う。	教育・研究機関である美術大学が有するギャラリーとして、「現代美術の発信」、「複合芸術の実践」、「人材育成のプラットフォーム」という2018年度にワーキンググループで作成した方針の実践を進める。	各展覧会について、告知のみならず、開催報告及び展覧会レビューをウェブ、SNSに掲載し、方針及び実践内容の周知を図る。(2020年度目標)			3	1		5	
				深谷春香個展「痕跡器官」	2022/9/24	～	2022/10/30	BIYONG POINT	学生公募企画から採択された作品を展示	教育・研究機関である美術大学が有するギャラリーとして、「現代美術の発信」、「複合芸術の実践」、「人材育成のプラットフォーム」という2018年度にワーキンググループで作成した方針の実践を進める。	各展覧会について、告知のみならず、開催報告及び展覧会レビューをウェブ、SNSに掲載し、方針及び実践内容の周知を図る。(2020年度目標)	藤先生、飯倉先生		3	1		4	

2022年度 事業報告書(概要・実績等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	事業期間(開始)	～	事業期間(終了)	主たる会場	事業概要	目的	目標	協力教員	協力者・機関	参加者数(総数)	報道件数	PR実績(配信数)	ウェブ実績(掲載数)	SNS実績(投稿数)	
				松下直史個展「L'heure bleue ルールブルー」	2023/1/15	～	2023/3/26	BIYONG POINT	学生公募企画から採択された展覧会開催に向けた広報や制作活動の事前準備	教育・研究機関である美術大学が有するギャラリーとして、「現代美術の発信」、「複合芸術の実践」、「人材育成のプラットフォーム」という2018年度にワーキンググループで作成した方針の実践を進める。	各展覧会について、告知のみならず、開催報告及び展覧会レビューをウェブ、SNSに掲載し、方針及び実践内容の周知を図る。(2020年度目標)			イベント参加:14		1	1	7	
	単独受託	広報	全国美術高等学校協議会・研究協議会(秋田オンライン大会)のオンライン運営業務	-	2022/9/6	～	2022/9/16		秋田公立美術大学附属高等学院がホストする全国美術高等学校協議会・研究協議会(秋田オンライン大会)のオンライン運営業務を受託する。				秋田公立美術大学附属高等学院、スタジオSSB						
			環境芸術学会第23回秋田大会のエクスカージョン運営支援	-	2022/9/30	～	2022/10/1	秋田市文化創造館	環境芸術学会第23回秋田大会のエクスカージョンの運営に係る業務の支援を行うもの。	法人として新たな収益事業の開拓に向けた実験として									
④ 展覧会や子どもを含む市民向け講座を通じた芸術の普及に関する事業	秋田公立美術大学	広報	サテライトセンター企画展	サテライトセンター企画展共通	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学サテライトセンター(ギャラリー、情報発信コーナー)	秋田公立美術大学サテライトセンターのギャラリーおよび情報発信コーナーを活用し、秋田公立美術大学の教育・研究成果を発表する展覧会を企画・制作する。	秋田公立美術大学の地域との連携に係る取組みを紹介する展覧会や、「美術」について関心を喚起し将来の担い手を掘り起こすための展覧会等を企画し、実施する。	秋田公立美術大学の多様な取組みを紹介する展示を企画・開催する。また、幅広い世代が展覧会に足を運ぶよう展覧会情報の発信を、多様な媒体を活用して行う。								
				雑がみランド	2022/4/1	～	2022/9/30	秋田公立美術大学サテライトセンター	雑がみを活用したワークショップおよび展示事業。	秋田公立美術大学の地域との連携に係る取組みを紹介する展覧会や、「美術」について関心を喚起し将来の担い手を掘り起こすための展覧会等を企画し、実施する。	秋田公立美術大学の多様な取組みを紹介する展示を企画・開催する。また、幅広い世代が展覧会に足を運ぶよう展覧会情報の発信を、多様な媒体を活用して行う。	来場者数:556	3	1	1				
				卒業生シリーズ Vol.9	2022/4/1	～	2022/12/31	秋田公立美術大学サテライトセンター	個展またはグループ展により秋田公立美術大学の卒業生の活動を紹介する企画展を実施。秋田公立美術大学の卒業生シリーズ第9弾として、秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科を2019年に修了し、現在、矢留彫金工房で副工房長を務める高橋香澄を特集します。本展では秋田銀線細工の制作に新しいデザインやアートの視点を融合して制作する高橋と矢留彫金工房の取組みを軸に、地域企業との共同開発や秋田公立美術大学附属高等学院の生徒作品等を展示。次世代への技術の継承	秋田公立美術大学の地域との連携に係る取組みを紹介する展覧会や、「美術」について関心を喚起し将来の担い手を掘り起こすための展覧会等を企画し、実施する。	秋田公立美術大学の多様な取組みを紹介する展示を企画・開催する。また、幅広い世代が展覧会に足を運ぶよう展覧会情報の発信を、多様な媒体を活用して行う。	矢留彫金工房	563	4	1	1			
				情報発信コーナー企画	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学サテライトセンター	秋田公立美術大学の多様な社会連携事業や教員・学生らの活動を紹介する展示のフレームを構築し、秋田公立美術大学サテライトセンター内の「情報発信コーナー」において公開する。	秋田公立美術大学の地域との連携に係る取組みを紹介する展覧会や、「美術」について関心を喚起し将来の担い手を掘り起こすための展覧会等を企画し、実施する。	秋田公立美術大学の多様な取組みを紹介する展示を企画・開催する。また、幅広い世代が展覧会に足を運ぶよう展覧会情報の発信を、多様な媒体を活用して行う。		0	0	0	0			
				アニメーション展	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学サテライトセンター	国内外で注目される学生アニメーションの最前線「ICAF(インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル)」。全国の大学や専門学校で制作されたアニメーション作品を一室にあつめて上映する映画祭に秋田公立美術大学は昨年はじめて参加し、在学生・卒業生・大学院生の10作品を出展。20回目を迎える今年のICAFにも参加を予定している。学生アニメーションの最前線に食い込むべく、前哨戦的なアニメーション展として昨年度に続き企画。ICAFに向けた作品のブラッシュアップや学生の技術向上を促すきっかけとなることを目指す	秋田公立美術大学の地域との連携に係る取組みを紹介する展覧会や、「美術」について関心を喚起し将来の担い手を掘り起こすための展覧会等を企画し、実施する。	秋田公立美術大学の多様な取組みを紹介する展示を企画・開催する。また、幅広い世代が展覧会に足を運ぶよう展覧会情報の発信を、多様な媒体を活用して行う。	萩原健一 准教授(ビジュアルアーツ専攻)	378	1	1	3	7		
				卒業生シリーズ図録制作	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学サテライトセンター	秋田公立美術大学サテライトセンターにて2018年度に第一弾を開催して以来、年2～3人を取り上げてきた卒業生シリーズ。2022年度は2人を予定し、2～3月に開催予定の折出展で10回目を迎える。2023年度は秋田公立美術大学の開学10周年という節目でもあることから、卒業生シリーズのこれまでの記録をまとめた図録を制作。展覧会をアーカイブしながら卒業後の活動を紹介しますと同時に、各卒業生が所属した専攻の特徴や魅力をアピールして大学広報につなげる。	秋田公立美術大学の地域との連携に係る取組みを紹介し、「美術」について関心を喚起し将来の担い手を掘り起こす卒業生シリーズの展覧会と卒業生の活動を紹介する図録を制作し、卒業生の活躍を通して大学を広報する。	秋田公立美術大学の多様な取組みを紹介する卒業生シリーズの図録を制作する。卒業生の活躍を広報することで幅広い世代が秋田公立美術大学に関心を寄せるような制作を行う。								
				AKIBI ARTs MARKET 2023	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学サテライトセンター	秋田公立美術大学の学生による作品の展示販売事業。	秋田公立美術大学の地域との連携に係る取組みを紹介する展覧会や、「美術」について関心を喚起し将来の担い手を掘り起こすための展覧会等を企画し、実施する。	秋田公立美術大学の多様な取組みを紹介する展示を企画・開催する。また、幅広い世代が展覧会に足を運ぶよう展覧会情報の発信を、多様な媒体を活用して行う。		674	4	1	1	1		

2022年度 事業報告書(概要・実績等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	事業期間(開始)	～	事業期間(終了)	主たる会場	事業概要	目的	目標	協力教員	協力者・機関	参加者数(総数)	報道件数	PR実績(配信数)	ウェブ実績(掲載数)	SNS実績(投稿数)
	秋田公立美術大学	教育	こどもアート Lab.	こどもアート Lab.共通	2022/4/1	～	2023/1/31		美大の教員・助手とともに、小学生を対象としたアートワークショップのプログラムを、秋田市文化創造館とも連携し、企画し実施する。	美大の教員・助手とともに、学校教育下の美術教育とは異なる新たなこども向けワークショッププログラムを、地域と連携しながら開発・実践し、美術に関心をもつ人々を増やす。	美大の教員・助手とともに、小学生を対象としたアートワークショップのプログラムを、秋田市文化創造館とも連携し、企画し実施する。			20 (内訳:NEOび10/植物ってどんなかたち?10)	1	1	7 (1/29)	89
				NEOびじゅつじゅんびしつ	2022/4/1	～	2022/8/28	秋田市内	美大の教員・助手とともに、小学生を対象としたアートワークショップのプログラムを、秋田市文化創造館とも連携し、企画し実施する。	美大の教員・助手とともに、学校教育下の美術教育とは異なる新たなこども向けワークショッププログラムを、地域と連携しながら開発・実践し、美術に関心をもつ人々を増やす。	美大の教員・助手とともに、小学生を対象としたアートワークショップのプログラムを、秋田市文化創造館とも連携し、企画し実施する。			10	0	2	67	
				瀬沼健太郎回	2022/9/24	～	2022/12/25	秋田市文化創造館	美大の教員・助手とともに、小学生を対象としたアートワークショップのプログラムを、秋田市文化創造館とも連携し、企画し実施する。	美大の教員・助手とともに、学校教育下の美術教育とは異なる新たなこども向けワークショッププログラムを、地域と連携しながら開発・実践し、美術に関心をもつ人々を増やす。	美大の教員・助手とともに、小学生を対象としたアートワークショップのプログラムを、秋田市文化創造館とも連携し、企画し実施する。	秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻瀬沼健太郎准教授	秋田市文化創造館	10	1	1	1	22
⑤ 秋田公立美術大学の地域連携や社会貢献、広報活動等の支援に関する事業	秋田公立美術大学	広報	高校生クリエイティブアワード	-	2022/4/1	～	2023/2/28		全国の高校生を対象に、高校生自身が主体的に取り組んでいる活動を動画で公募する。活動規模、ジャンル、これまでの評価や成果を問わず、応募された活動への高校生自身の欲求や衝動を活動に変えようとする主体性を軸に評価する。一次審査を通過した応募者は、審査員と応募者全員との交流会に参加し、そこのやりとりを経て最終審査を行う。最終審査にて金・銀・銅の各賞を選考し、活動資金として賞金と副賞を贈る。 応募された活動動画(3分以内)は、著作権・肖像権の侵害がない限り、全て公式WebサイトおよびYouTube等にて公開し、	全国の高校生及び高校関係者、美術関係者を対象に、秋田公立美術大学の特徴である「主体的な取組みを評価する」大学であることの認知が広まる。	全国の高校生及び高校関係者、美術関係者を対象に、秋田公立美術大学の「主体的な取組みを評価する」募集に関する広報物を制作し、高校生の内発的動機付けから生じる活動の公募として全国の高校等へ周知する。応募者に対しては、高校生自身の「主体的な取組みを評価する」秋田公立美術大学の特徴が伝わるような機会を設け、審査員をはじめとする事業関係者や応募者相互の交流により自らの興味・関心を広げるための機会を提供する。	柚木恵介先生(審査員長)、曾根博美先生	田中偉一郎(審査員)、JR秋田支社地域活性化室(協賛)、JA全農あきたパールライス課(協賛)、岡室健(広報デザイナー)、HAUS(ウェブデザイナー)、秋田魁新報社(協賛)	149	1	3	3(1/29)	Instagram:172 twitter:254 FaceBook:28
秋田公立美術大学	広報	大学広報	大学広報	2022/4/1	～	2023/3/31		アーツセンターあきたが関わる事業情報をまとめ、広報あきたへの掲載やプレスリリースの配信、大学事務局と連携した各種広報媒体への掲載やマスコミによる取材促進に努める。	アーツセンターあきたが関わる秋田公立美術大学の各種地域連携の取組みの露出機会を増やし、特に秋田県内と美術関係者を中心に大学の認知度や活動の理解促進を図る。	地域の専門家の評価向上(年末の魁新報文化欄総括での言及等)や専門メディアへの情報掲載を目指す	広報委員会、社会連携委員会		83,555	33	18			
			大学案内制作2022-2023	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学	主に受験広報に活用する素材として大学案内を制作、印刷納品する。	秋田公立美術大学の取組みをPRする媒体を制作し、潜在的な受験者の掘起しを図る。	広報委員会と連携し、秋田公立美術大学の強み・売りと受験生が必要とする情報を効果的に盛り込んだ媒体を制作し、適時に納品する。	広報委員会							
			大学案内制作2023-2024	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学	主に受験広報に活用する素材として大学案内を制作、印刷納品する。	秋田公立美術大学の取組みをPRする媒体を制作し、潜在的な受験者の掘起しを図る。	広報委員会と連携し、秋田公立美術大学の強み・売りと受験生が必要とする情報を効果的に盛り込んだ媒体を制作し、適時に納品する。	広報委員会		0	0	0	0	0	
⑥ 芸術に関する技術指導に関する事業	秋田公立美術大学	教育	デッサンスクール	-	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学サテライトセンター	中高生を対象にしたデッサンスクールを開講し、秋田公立美術大学の志望者・受験者の掘起しとスキルアップを図る。	「美術」の担い手を育成を見据え、デッサン指導を行うスクールを開講し、秋田公立美術大学入学者の掘起しと潜在的入学者のスキルアップ支援を行う。	受講者の中から秋田公立美術大学への合格者や進学希望者を輩出する。	草薙裕 助教、大関智子 助教、清水理瑚 助手、日野沙耶 助手	秋田公立美術大学附属高等学院 教諭 岸上恭史、教諭 松田明徳	定員総数:60 申込総数:102 実際の受講生総数:59 欠席:1 キャンセル待ち:42	0	1	1	0
秋田公立美術大学	教育	素描Lab	-	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大学サテライトセンター デッサンルーム	中高生を対象にした素描を自習方式で学ぶ会員制のスペースを設置・開放し、秋田公立美術大学の志望者・受験者の掘起しとスキルアップを図る。	「美術」の担い手を育成を見据え、素描の自習や合評を通じた指導を行うスクールを開講し、秋田公立美術大学入学者の掘起しと潜在的入学者のスキルアップ支援を行う。	受講者の中から秋田公立美術大学への合格者や進学希望者を輩出する。	藤浩志教授／大関智子助教／青木邦仁AR助手／清水理瑚MD助手／中田大介MD助手		87 (内訳:延人数:無料体験会員13、8月~3月会員74)	0	1	1	0	

2022年度 事業報告書(概要・実績等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	事業期間(開始)	～	事業期間(終了)	主たる会場	事業概要	目的	目標	協力教員	協力者・機関	参加者数(総数)	報道件数	PR実績(配信数)	ウェブ実績(掲載数)	SNS実績(投稿数)
⑧ 公共施設等の管理・運営事業	秋田市文化創造館	指定管理	空間の提供	フリースペース活用	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田市文化創造館コミュニティスペース・デッキ・屋外エリア	コミュニティスペース・デッキ・屋外エリアを中心に館内外のフリースペースの活用を図り、イベント等が行われている時だけでなく、市民が日常的に利用できる空間を提供する。	魅力的な建築空間を活かし、すべての人に開かれた環境を日常的に提供する	多様な人が繰り返し訪れ、それぞれに館を活用する積極的な態度を高める			12,449	8	2	17	
				事業パートナーとの連携	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田市文化創造館	2021年度に引き続き(株)スパイラルエーを事業パートナーとし、2021年度にはコロナの影響で実現できなかったケータリングメニューの開発や、ショップ取扱商品に関わるワークショップ等のイベントを共同開催する。	魅力的な建築空間を活かし、すべての人に開かれた環境を日常的に提供する	多様な人が繰り返し訪れ、それぞれに館を活用する積極的な態度を高める			1,981		1	1	
				ヨルカツペシャルちいさな雪まつり	2023/1/10	～	2023/2/13	秋田市文化創造館 屋外エリア	秋田県の「新たなナイトタイムコンテンツ創出事業」として、秋田市文化創造館でも夜間の活動創出を目的に、市民が屋外エリアの積雪を利用した雪像づくりの機会を設ける	秋田市文化創造館の厳冬期の屋外利用促進と、来館者増をねらう		株式会社ジェイアール東日本企画	1000	3	1	2	Instagram: 2 twitter: 12	
秋田市文化創造館	指定管理	機会の提供	ラーニングプログラム「未来の生活を考えるスクール」	2022/4/21	～	2023/3/3	秋田市文化創造館	秋田市民を対象に、既存のジャンルを超えた領域で活動する人を招いたトークイベント・上映会・ワークショップ等を開催する。	背景や価値観の異なる人が交流し、創造力を養う出会いの機会をつくる	来館者の興味関心・視野・ネットワークを広げ、文化芸術への積極的な態度を高める			92		4			
			コミュニケーションプログラム「カタルバー」	2022/4/1	～	2023/3/31	文化創造館敷地内	「未来の生活を考えるスクール」などの事業後の対話の機会や貸し館利用者同士の交流創出の場として実施する。また、地元のプレーヤーにラフに話を聞く場としての設定。主体性のある施設利用者や組んだ企画も開催する。主体的には年4-6回実施しながら、利用状況に応じて不定期開催。	文化創造館や中心市街地を舞台に実施される市民活動を促す	来館者の興味関心・視野・ネットワークを広げ、文化芸術への積極的な態度を高める				32	0	13	117	
			コンシェルジュサービス	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田市文化創造館	・来館者の利便性向上や利活用促進のための各種案内業務、および創造的活動の支援を目的とした相談業務 ・職員の技術向上も兼ねたテクニカル勉強会の開催	背景や価値観の異なる人が交流し、創造力を養う出会いの機会をつくる	来館者の興味関心・視野・ネットワークを広げ、文化芸術への積極的な態度を高める								
秋田市文化創造館	指定管理	創造支援	創造支援共通	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田市文化創造館		市民やクリエイターのアイデアの実現や情報発信をサポートし、創造力を発揮する活動を支援する	新たな活動の企画運営に対する意欲や積極性が高まり、多様な企画が生まれる機運をつくる			相談件数: 15					
			企画の共催・支援	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田市文化創造館	秋田市文化創造館の設置目的に沿った活動や事業について、一定の審査を経て、共催および活動支援事業と認定。施設および設備使用料の負担、広報協力、コーディネートによるサポート等を行う。このことにより、文化創造館の認知度アップが図れること、市民による創造的活動が活発化することを期待する。	市民やクリエイターのアイデアの実現や情報発信をサポートし、創造力を発揮する活動を支援する	新たな活動の企画運営に対する意欲や積極性が高まり、多様な企画が生まれる機運をつくる								
秋田市文化創造館	指定管理	創造実験	キュレーション企画	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田市文化創造館	文化創造館コーディネーター・ディレクターが独自に選考した専門家を招聘し、創造実験事業を推進するためのリサーチ・勉強会・実験などを市民に公開・参画しながら行う。本年度の成果を活かし、次年度の発表に繋げる。	来館者の創造力を刺激する実験的な事業を行う	地域や社会に対する新たな視点を提供し、創造的な活動が生まれる機運をつくる			95	1	1	1		
			クリエイター・イン・レジデンス2022(白井仁美)	2022/4/29	～	2023/2/28	秋田市文化創造館、及びその周辺	2021年度「SPACE LABO 2021」で採用されたまちなか活動プランの実施。秋田市内で滞在制作を行い、その成果を主として秋田市中心市街地のまちなかをフィールドに発表する。発表の経過を来館者や市民に共有することで、市民の創造性や新たに創造的な活動が生まれるきっかけづくりを目指す。	来館者の創造力を刺激する実験的な事業を行う	地域や社会に対する新たな視点を提供し、創造的な活動が生まれる機運をつくる			5	2	8			
			クリエイター・イン・レジデンス2022(おおしまたくろう)	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田市文化創造館、及びその周辺	2021年度「SPACE LABO 2021」で採用されたまちなか活動プランの実施。秋田市内で滞在制作を行い、その成果を主として秋田市中心市街地のまちなかをフィールドに発表する。発表の経過を来館者や市民に共有することで、市民の創造性や新たに創造的な活動が生まれるきっかけづくりを目指す。	来館者の創造力を刺激する実験的な事業を行う	地域や社会に対する新たな視点を提供し、創造的な活動が生まれる機運をつくる			647	3	1	6		

2022年度 事業報告書(概要・実績等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	事業期間 (開始)	～	事業期間 (終了)	主たる会場	事業概要	目的	目標	協力教員	協力者・機関	参加者数 (総数)	報道件数	PR実績 (配信数)	ウェブ実績 (掲載数)	SNS実績 (投稿数)
⑨ その他 目的を達成 するために必要な 事業	自主事業	広報	法人広報	法人ウェブサイトの マイナーチェンジ	2022/4/1	～	2022/9/30		バナー情報の入れ替えや文字表示の不 具合を解消し、ユーザーが必要な情報に アクセスできるよう現行のウェブサイトを改 修する。	アーツセンターあきたのウェブサイトを改修 し、ユーザーアクセシビリティを改善する。	バナー情報の入れ替えや文字表示 の不具合を解消し、ユーザーが必要 な情報にアクセスできるよう改善す る。		キタデザイン					
				ウェブサイトのリ ニューアル準備	2022/4/1	～	2023/3/31	秋田公立美術大 学	2023年度上半期中の公開を目標に、法人 ブランドイメージの向上と法人が取組む活 動に関する情報の認知向上を図ることを目 的に、ウェブサイトのリニューアルの準備を 進める。	法人ブランドイメージの向上と法人が取組 む活動に関する情報の認知向上を図る。	2023年度上半期中の公開に向けた ロードマップを作成し、法人ウェブサ イトの方向性や機能を定めてデザイ ン作業に着手する。							
				「200年をたがやす」 図録販売	2022/4/1	～	2023/3/31		秋田市文化創造プロジェクト・リーディング 事業として2021年度に開催した展覧会 「200年をたがやす」の図録をAmazonや市 内書店等で販売する。	事業成果の波及効果を高めるため、成果 物である図録を販売する。	今後の事業においても活用できるよ う、ネットショップや書店等での販売 経路を確保し、販売のノウハウを蓄 積する。							
	自主事業	広報	ART JOB FAIR出展	-	2023/1/23	～	2023/2/10	カイク東京	採用活動・法人広報の一環としてART JOB FAIRに出展し、首都圏を中心とした アート業界への就職希望者や業界関係者 を対象に、アーツセンターあきたの取組に ついて認知を高める契機とする。	首都圏を中心としたアート業界への就職 希望者や業界関係者を対象に、アーツセ ンターあきたの取組について認知を高め る。	アート業界への就職希望者や業界 関係者を対象に、アーツセンターあ きたの取組について認知を高めると ともに、特に有望な候補者について は将来の応募につなげる。							

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
① 地域団体と連携した芸術活動の推進に関する事業	大学受託	地域連携	ドンパン娘シンボルキャラクター・ロゴ作成事業	-	大仙市の担当者、ドンパン祭り実行委員会と密に連絡を取り、教員・学生自身が聞き取りを進めて制作に反映したことで、委託者の満足度は高かった。制作期間中には現地調査でドンパン娘たちや市民の方へ話を聞き市民アンケートを行うなど多くの市民の事業への関与があった。特に、市民アンケートは事業について大仙市の方々知ってもらう機会となり、いただいた意見をキャラクターに反映することもでき、制作に大きく影響を与えた。制作は主に学生が行った。大仙市やドンパン祭り実行委員会へ学生が直接プレゼンテーションを実施。成果品が世の中で使用されることで、学生の経験と実績につながる大きな機会となった。当初、委託者は大学が持つ成果物の著作権の譲渡を希望していたが、譲渡金の協議の結果、著作権は大学に残し、大仙市の利用を許諾するという形となった。長期間の利用が想定される成果物に関し、著作権を譲渡すべきか否か、前例を作る事ができた。	契約前段階で著作権は委託者に譲渡するという話になっていたが大学側で著作権に関する方針が定まっていなく、委託者との協議段階になってから譲渡金が発生するなど、急な協議が求められた。社会連携事業における成果物の著作権について、大学の基本的な方針を確認し、契約書の雛形などの作成が必要と考える。また、市民アンケートの作成は美大が行ったが、契約にないもので時間が足りず学生のキャパシティを超えていたものとする。契約外で何か作成することがある場合は教員がよしとしてもきちんと条件などを確認した上で、参加する教員と学生の承諾を得る必要がある。完成間近には修正依頼が多発し、学生のモチベーション低下につながった。長期間の制作に関しては修正の回数や修正依頼のやり方など定めておくこと制作がスムーズにいくと感じた。	事業全体を通して、教員だけではなく学生の関与が大きかった。学生自らが制作し、委託者への聞き取りを行い、プレゼン資料作成や説明を担うなど、将来につながる経験と実績となったと考える。ロゴやキャラクター制作については、どの範囲(ポーズ数や表情数、使用展開例は必要かなど)まで制作するのか、著作権はどうするのか、成果物に関して問題が起きた時の責任はどかが持つのか、修正は何回までかなどを契約時に確認しておく必要があると感じた。確認しないまま事業を進めると、委託者から予算と時間的コスト以上の期待と注文がきて、対応しきれないことがある。特に著作権については、作家側の権利を守るため、しっかりと取り決めておく必要がある。今回、事業を通して大学の成果物に対する著作権の協議ができたことは、今後、同様の事業があったときの参考になるのではないかと。
	大学受託	地域連携	にかほ市・秋田公立美術大学協働事業「ジオカルチャー研究プロジェクト」	-	昨年度のリサーチを経て、「ジオ(大地)」「エコ(生態系)」「ひと(人間)」の3つの存在区分を統合する新しい概念として「ジオカルチャー・ツーリズム」という概念を掲げ、「野外アクティビティ領域」「伝統・伝承領域」「地域資源領域」の3つの領域の視点から新たな地域の可能性を探る研究を行った。野外アクティビティ領域では、「にかほまでそとね」と題し、鳥海山麓の環境下で移動を止めて見えてくる体験を探求。knollingという撮影手法を用いて森や湿原での過ごし方を探求し、アクティブではない野外活動という新しい視点を提案することができた。伝統・伝承領域では、お盆や小正月行事に随行し、にかほ市民に脈々と受け継がれる伝統を幅広い世代から生の声を聞き取った。なり手不足から伝統の継承が難しいといわれる現代において、伝統行事の内容や市民の思いを聞き取り、研究として保存することができるのはにかほ市にとっても大きな成果だと伝えられた。地域資源領域では、著名ではない金浦・仁賀保地域の地元にとって当たり前の風景だった「流れ山」に着目した。にかほ各地域を特徴づける景観要素として、流れ山を研究・評価し、新たな地域資源として位置づけた。流れ山をめぐるまち歩きイベントには市内外から参加があり、「普段の風景が特別なもの知った」などとイベントに対する評価も高かった。また、タブロイド《手長足長》はにかほ市各所に配布することができた。一見して興味を引くようなビジュアルで、研究への理解増進につながるものと考えている。	本年度は、昨年度のリサーチを踏まえてから初年度だったこともあり、一般市民が研究に参加するまで至らない研究があった。だが、いずれも学生や映像・写真撮影で教員以外の参加が見られ、一般市民に広げていくまでのテストの年になったのではないかと。まち歩き等一般の方の参加が今後見込まれるが、イベント中の安全対策など考慮すべき点があると考える。一方で、美術大学らしい柔軟な発想を今後も失わないよう、アーツセンターとして研究におけるあらゆる調整が円滑に進むよう意識すべきである。	3つの研究とも、新たな地域資源の視点を提示しており、一参加者として興味深い研究ばかりだった。野外アクティビティ領域・地域資源領域では、学生の関与も大きかった。野外アクティビティ領域では、野外でのアクティブではない過ごし方から美大生らしいユニークな感性を感じた。地域資源領域では、日本造園学会での発表も行き、学生の経験につながった。伝統・伝承領域では、にかほ市に残る伝統の継承という面からも非常に重要な資料を提示できたと考える。いずれもにかほ市のご担当者も好反応で、来年度以降の広がりを期待したい。
	大学受託	指定管理	ピヨンスケープ	-	2015年(仮設足場)、2017年度(すべり台状ミニチュメント)、2018年度(倉庫の壁画)、2020年度(遊歩道・ポケットパーク)のこれまでのピヨンスケープの流れを再確認することで、構造物からランドスケープへと移行されてきた方向性を継承する布状の柔らかな作品を使ったインスタレーション計画への展開として位置付けることができる事業となった。また、秋田市立美術工芸専門学校の卒業生のサイン制作会社との協働による作品設置装置開発は、卒業生と大学とのネットワーク形成に寄与する一例として考えることができる。	・外観デザインから外構デザインにつなげ、CNAを中心とする面的な展開を視野に入れるか。 ・制作会社等との連絡調整方法の改善。	フラッグポールを包むように設置される円筒形の布状作品の制作と展示は実験的なものでもあり、新しく取付具や装置の開発を含むものとして実施されたことは、教員だけでなく制作会社の知見にもつながったことが設置作業を通して聞き取れた。制作会社の技術向上も含めて、この方法による作品制作・設置が他所にも転用されることを期待する。
大学受託	地域連携	大森山アートプロジェクト	-	「あそび×まなびのひろば Vol.4 -ことばのしるし-」監修:村山修二郎(アーツ&ルーツ専攻准教授) 会場:大森山公園グリーン広場～彫刻の森一帯 会期:7月30日～9月4日 を在学学生・卒業生合わせて16名で取り組み、作品制作と展示だけでなく、会場案内サイン、展覧会案内チラシ・ポスターを制作した。また、週1回の巡回を学生の持ち回りでを行い、展覧会運営時のメンテナンスを学ぶ場にもなっていた。展覧会の記録を『ことばのしるし あそび×まなびのひろば vol.4活動記録集』(編集:村山修二郎)として発行した。 また、展覧会に合わせ、フォンテAKITA6階の情報発信コーナーにて、2021年度の成果の一つである「どうぶつ学ぼーど」を用いた巨大迷路とスタンブラリーを設置し、「どうぶつ学ぼーど」のビジュアルブック『いろいろ学べるどうぶつ学ぼーど』を配布するなど、大森山アートプロジェクトの広報に取り組んだ。(情報発信コーナー展示として)	参加学生数や展覧会の内容などコーディネーターが関与する場面が多く、教員や学生と知り合い、良い関係性を作る機会となっているが、一方で時間的コストも掛かっていることについて予算の確保が課題と考える。また、来場者数や来場者アンケート回答数の増加を含めて広報面に改善の余地がある。	今年度はじめて大森山アートプロジェクトに関わり、約15年間、大森山動物園と秋田公立美術大学がさまざまなプロジェクトに取り組んできたことが、今の大森山の景観に大きく関わっているのだと実感した。2023年は大森山動物園が開園50周年をむかえ、記念すべき年であるとともに、節目の年となる。その中で、これから大森山動物園と秋田公立美術大学が共に取り組むことが、周辺地域に広がることで新しい可能性をつくり出していけるのではないかと思う。例えば、公共交通機関を利用して訪れる人をターゲットに、現在設置されているものに加えて、西部サーピスセンターや新屋駅近辺でイベントやショップ(はじめはワゴンショップなど期間限定でできるもの)を開催し、動物園があるまちとして道すがら楽しめるような場を展開していくなど。取り組みを大森山近辺に留めず、今までの活動の積み重ねをまちの新たな魅力づくりに活かせたらと考える。	
単独受託		文化創造プロジェクト	-	・メディアへの掲載があったことから、多くの市民の目につくこととなり、イベントに多様な層が参加した。PARKのイベントをきっかけに初めて文化創造館に来館した参加者も多かった。 ・育むメンバーが「観察する」プロジェクトの和井内さんのお手伝いを行ったり、アウトクロープの作品を鑑賞することで新たな視点を聞き、活動に対してポジティブな動きが出るなど、異なるプロジェクトを交差して相乗効果が出ている。 ・「観察する」プロジェクトでクリエイターのリサーチやアウトプットの関係で、近隣施設や団体との関わりが増え、関係性を構築したほか、まちに繰り出し文化創造プロジェクトがより広く市民につたわるきっかけを作った。 ・「出会う」にて、幅広い層の参加者に対し満足度が高く、新たな視点を得、学びを促す機会を創出した。	・予算と実務内容のバランスの悪さ(業務量が圧迫している) ・文化創造館の中で大事な部分になっているにもかかわらず、秋田市主催と切り離されていることで、館内で別の動きのような対応になってしまっている。館全体で盛り上げる機運をつくってきたい。 ・単年度契約のため予算が不透明な部分があり、次年度以降の長期的な計画を立てにくい ・行政が主催する「文化創造プロジェクト」全体の方向性やディレクションについて明確な共有がなく、企画調整課との合意形成に難しさを感じる。 ・新聞等の紹介はあるが、SNS等のフォロワー数やインプレッション数はあまり伸びていない	本来は複数年度で展開していく事業の1年目、リサーチ/下地づくりとして行う予定が、想定以上に本格的な活動へと展開した。また本年を通して「PARK-いきるとつくるの」にわ」に対しての認知度が向上し、翌年度の展開へ結びつく種や関係性が育めたと感じている。今後、文化創造館の事業(や近隣の文化施設事業/まちなかでのイベント・活動)と文化創造プロジェクトが組み合わって展開されることで、秋田市の文化芸術やそれに親しむ人たちに対して意義ある運動となっていくのではないかと期待感を持って取り組むことができている。一方で、市がacaに対して求める働きは委託費に見合わない業務量/内容であることに強い課題感を感じ、aca内部での体制や年間事業量の調整を行う十分な時間もないままに進行がスタートしたことから、現場に過大な負担がかかっていたと感じている。継続して市との交渉を重ねながら、企画の質や満足度を担保しつつ、業務やディレクションが適正に行われるよう改善されたい。	

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
	大学受託	地域連携	選手村ビレッジプラザ提供木材後利用事業	選手村ビレッジプラザ・ハード	当初、参考として提示されたのは既存遊具だったが、オリンピック・パラリンピックのレガシーを返却された「木材」だけでなく、身体を動かす空間を形作っていたことと捉え、「小さな小さなオリンピックスタジアム」というコンセプトで利用者の創造的な身体運動を促す、使い方を明確に規定しない空間設計を取り入れた。最初の提案はスロープや段差のみで空間をつくるというもので、大館市のご担当者から難色を示されていた。だが調整を加え、すべり台や机などの役割を持った遊具をスロープや段差でつなげて空間全体を設計するという形にした所、「子どもの遊び場」オープン日に地元の子どもたちが年齢を越えて一緒に遊び、遊びを創作する姿を見て、ご担当者からは理解と高評価を得られた。また、訪れた保護者からも「子どもが使うものだから優しい手触りで安全に遊べて良い」と安全性への評価と事業への関心、歓迎の声が多く上がっていた。加えて、報道されたことで事業に対する認知を広めることができた。制作・設計には「ORAEアクタファニチャー」メンバーである多くの県内木工事業者のご協力を得て、民間の事業者、大館市、秋田公立美術大学という産学官連携で事業を実施できた。	(ハード・ソフト共通) ACA担当変更後、新任の事業に対する理解度が不十分な点があり、委託者や協力企業のお手数をお掛けした。大館市からの受託の相談は2021年度にあったが、22年度からの担当者がいずれも新任だったため、契約の経緯や事業への理解度が当初不足していた。担当者が変わる場合、委託者との顔合わせや現地視察、契約内容の確認(企画課との調整含む)、前年度資料の確認などを早めに行う必要がある。また、「事業を委託する」ということに関して大館市と美大の間に認識違いがあるように感じた。大館市は下請けに出すイメージで、契約内容や注文内容なども大館市が主体となるという姿勢だったが、美大はあくまで依頼があつて(お願いされて)美大が主体となって事業を行うという認識であった。契約に至るまでの打ち合わせの間に、美大に委託するとどのような事業の流れになるかを十分に説明する必要があると感じた。 (ハード) プレスリリース1回に対し報道が3件あつたが、デザインの意図まで触れられていたものではなく、美大が制作していることに言及していた報道は2件だった。どのような内容がニュースバリューがあるか判断し、端的に報道機関に伝えられるようなプレスリリースを作成する必要があるのではないか。	民間の事業者、大館市、秋田公立美術大学という産学官連携で事業を実施できたことは、美大の持つ専門的な知識を地域に還元する大きな機会となったと考える。産学官連携の事業だったため、学生の関与を増やすと良い事業になったのではないかと。今回は設置作業のみの参加だったが、設計や制作段階で関われば学生にとっても大きな経験となり、民間の事業者や市にとっても学生の率直な意見を取り入れる機会になったと考える。 オリパラ材のレガシー活用に関しては、全国的には小型モニュメントや秋田県が制作したベンチのような単に設置するものが多い中、「子どもの遊び場」という利用者の創造的な身体運動を促す空間設計に取り組んだことは、美大の発想力を生かした他に類を見ない事例となったと感じた。
				選手村ビレッジプラザ・ソフト	全3回のワークショップを実施。1回目は選手村ビレッジのこれまでの取り組みを学び、2・3回目には支援学校の生徒が木材の利活用方法を考案し、発表した。3回を通して「知る」「触る」「考える」「つくる」というプロセスを段階的に発展させたワークショップを実施した。 高校3年生、中学2年生の生徒たちは、見本のおもちゃを手にとって自由に遊びながら試行錯誤し、木材加工の新しいアイデアを考案していた。回を追うごとにアイデアは広がり、生徒たちの発想力に成長が見られた。 教員からは、ワークショップを通して普段とは違う学生の姿や成長する姿を見ることができ、学校教員内で共有することで生徒について考えるきっかけになったという声が上がっていた。	広報に関して、大館市全体への広報を含め、報道へのプレスリリースが早い段階で必要だったと考える。事業を多くの方に認知してもらうために、適正なタイミングでプレスリリースを出せるよう準備と委託者との情報共有をする必要がある。	生徒たちは遊びから試行錯誤し、木材利活用のアイデアの考えていた。今後は近隣の学校や保育へ向けての活動や、低学年へ向けたワークショップの実施などでオリンピックのレガシーを引き継ぎつつ、大館市の木育事業のPR強化への発展に繋げていきたい。
② 地域産業と連携した産業創出や芸術を通じた技術支援を行う事業	大学受託	地域連携	能代北高跡地利活用可能性検討業務	-	住民意見を収集しながら能代北高跡地での実践型ワークショップとして、長期滞在と企画を複合させた「北高跡地で宿泊してみる」と、短時間参加のイベント「北高跡地で展望してみる」を実施した。新型コロナウイルス感染症に対する配慮から、ワークショップの内容、配置などで困難はあったものの、業務計画で設定したワークショップ3件を実施し、ニューズレターおよび市役所市民交流スペースでのパネル展示で成果の公開に努めた。	これまで市の意向で地域活動団体の構成員をワークショップの参加者として進めてきたが、実践型ワークショップでは能代市民以外も含めた一般参加者を募り、従来とは異なる属性からの意見収集を試みている。多様な体験者と多様な意見の蓄積という観点からも、参加者の確保が課題となっており、広報開始時期の前倒しや広報手段の検討を進める必要がある。	対話レベルの実感として、「思考継続型プロジェクト」「仮設」といったワードや、実際に使用中であり方を検討していくというスタイルに対する反応に類似性があるように思われる。そもそもの物事への取り組み方の違いで「やり方」への評価が決まっているような感じを受けるが、実践型ワークショップの体験やその繰り返しは概念への印象を変える可能性もあることから、継続することが重要だと考えている。一方で、利用実験が能代市民主体で行われる期間を設けるなど、市民による多様な使われ方をベースとした利活用経験も必要ではないかと思う。次年度は能代の文化資源等に関心を持つグループとの共同イベントも検討されており、大学と市民による知見の相互活用のあり方もまた重要になると考えている。
	秋田公立美術大学	地域連携	地域連携	-	相談対応や協賛依頼等を通じて、相手方との関係性を高めることができてきている。具体的には、全国高校生何でも、アリ。Creative Awardについて魁新報社から協賛を得るにあたって、企業審査員としても関わっていただくことで、企業賞として大きく魁新報に掲載された。また、大仙市の事業について大仙市若者チャレンジ推進室とのやりとりを通じて、大学生によるフィールドワークを対象とする助成金事業の実施につなげ、申請手続き・報告の簡略化を実現することができた。	相談対応を通じた調査はできているが、その他の主体的、自主的な調査が少なく、その時間の確保が課題である。	秋田公立美術大学に委託することで、どれくらいの効果があるかが一般的には不明瞭な状況にあるように感じる。 秋田公立美術大学の社会連携事業について、経済あるいは社会インパクトの視点からの考察が必要なのかもしれない。 また、これまでのヒアリングから、企業からの相談では先方が概ね想定している事業費は10万円前後と考えられ、そのような取り組みから受託事業として関与していく必要性を感じる。
	大学受託	地域連携	能代街なか資源再活用プログラム開発研究	-	利用者数増加の手段の一つとして、能代松陽高校の美術部員を対象に本プロジェクトを紹介し、現地にて使い方や設備を案内した。スペースの通常利用開始時には、利用方法のポップアップやサイン等の制作に高校生2名が関わってくれたこととなった。その後の利用を経て、スペースへの要望・意見などが寄せられ、それらのニーズを参考に整備を進めることができた。 高校生への広報手段として秋田公立美術大学の教員等による講座を計画し、レクチャー[風がつくり出す景観(井上宗則先生)]、ワークショップ[「風」を感じる写真を用いたランプシェード制作(草薮裕先生)]、ワークショップ[風を視覚化するプログラミングを用いた映像制作(石田駿太助手)]を開催した。スペースの通常利用(高校生への開放)は、ニーズから平日15時～20時とし、ネットワークカメラで安全面の監視のうえで遠隔操作で解錠施錠を管理する実証実験を行った。	高校生や高校の先生に直接説明することで、利用者の増加が見られたことから、より多くの高校生、高校でのプロジェクト紹介、スペース案内を行う必要がある。高校生への広報・告知および高校・高校生のスケジュールとの調整に改善の余地があり、年度前半の高校との調整が課題である。 スペース利用の容易さについては定時オープンなども含めて改善されつつあるが、「入りやすさ」「滞在のしやすさ」については、今後の研究課題として挙げられている。また、その成果によっては、新たなスペースの設置を検討していくことも考えられるため、それらの資金獲得方法の開発も課題となっている。	多目的な利用が可能であることから、どのように利用して良いかわからず勉強スペースとしての利用者以外が増えない要因にもなっているように考えられるが、動画撮影、動画視聴、オンラインゲーム、待ち合わせなどの利用も見られる様になってきた。また、設置してあるノートには、こういったスペースを求めているという意見や、利用者自身の信頼で成り立っているという意見が記され、極めて静かにはあるが、高校生の居場所として認識され始めてきたことを感じている。 週5日の内2日くらいの利用率なので、その要因を探りながら様々な取り組みを実験していけるように努めたく思う。
	大学受託	地域連携	新屋歩道橋色彩計画	-	地域に長期的に残る目立つ建造物である歩道橋に対し、教員が「空の色」を反映させるという景観に溶け込むような色彩デザインを提案した。その色の選定に子どもから高齢の方、一般市民から地域の活動を主体的に担う方々まで多くの人が参加した。新屋のシンボルマークとして残り続けるための愛着や関心を引き出す効果があった	参加者の選定はACAが行っていたため、ACAと全く縁のない住民の参加が難しかった。紹介形式などにして、より多くの方に参加してもらう工夫が必要だった。 参加の交渉では断られることもあったため、丁寧な説明を心がけることと日頃から地域との信頼関係を築くことが大切と考える。 成果物提出の際、事前に詳細なデータ形式などを確認していなかったため、やや手間取ることがあった。事前に担当教員が同席のもと、確認をするべきである。	小学生や地域振興に尽力されている方、新屋を拠点とするスポーツ選手など、多様な新屋に関わる方々の参加を得られた。色選定は、地域のことや活動についての話を聞きながら行った。冊子に残すことで新屋地域で活動している団体・個人の方々が新屋にどんな思いを抱えているのか、地域で紹介する機会にもなると考える。来年度の歩道橋塗り替え後は地域により馴染んだ歩道橋として参加した人を中心に記憶に残り、愛着が生まれていくのではないかと。

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
③ 秋田公立美術大学が関わる芸術活動等の情報発信に関する事業	秋田公立美術大学	教育	BIYONG POINT	BIYONG POINT 共通	2021年度より引き続いてビヨンセレクションを継続。展覧会企画者本人らを対象とした学内公募から方法を変更し、学内教員・助手より推薦を募り選出された学内の学部生、研究生、院生を中心とした作品展示を行った。グループ展「例えば展」以降は、個展を中心に開催。個展経験のない／少ない学生を支援するため、大学助手による展示計画・設営に対するサポートの連携に取り組んだ。この取り組みにより、展覧会企画と展示設計の枠組みを整えることができた。前年度課題となっていた、隣接する保育園の昼寝時間帯の騒音対策については、設営前に明確に注意事項として伝えることで対処できた。CNA担当者やCNA側への理解度を高めるため、作品説明や展覧会企画のレクチャーなどを行うことで、搬入時の営業時間外作業について許可をいただけるなど、協力を得られる関係を作ることができた。広報部分については、コロナウイルス感染症が拡大していた時期は広報物の発送先を縮小していたが、学生の希望の箇所を含め、全国へ送付するなど今後の活動へ向けてのリサーチの強化を継続していく。	[2023年度について] 展示企画、展示設営の枠組みに関しては、助手へのサポートを全面的に行えるように、今後も改善が必要と考えられ、検討を進めていく。搬入当日の対応については助手のサポート部分を増加させるなど、業務依頼内容とそれに見合った委託費について精査する。 プレスリリースなど情報発信は、来場者の獲得へ向けて、告知方法や時期などを検討し強化を行う。併せて、来場者数の増加を目標に定める。 [2024年度に向けて] 次年度のビヨンポイントの運営に関する基盤と方法について、大学教員とも相談し、CNAを交えた調整が必須と考えている。	次年度に向けて、4月スタートの山本展について、上記を留意しサポートを行いフォローアップに努める。また秋美10周年の展覧会、ビヨンセレクションの有無など、アーカイヴ展と並行して検討できればと思う。 今年度は、2年目のビヨンセレクションの導入部分で事業内容を取りまとめへの時間がかかった。そのため次年度に向けてBIYONG POINTの今後の指針に関し時間を有すると考えられる。その分の時間を設けつつ、今後の方針を固める。
				早坂葉・後藤那月「めぐりに渗む」	ギャラリースペースでは後藤さんの作品を展示し、奥のバックヤードでは暗室を組み立て、早坂さんの映像を流す展示形態を取り、空間をうまく利用した展示ができた。また、コロナ禍の状況ではあったが、県外ゲストの是恒さくら氏を招いたトークイベントを滞りなく開催できた。定員10名のところを16名の参加者があり、イベントの呼びかけもうまくできたと思う。	コーディネートを担当する学生との連携がうまくできず、全体のスケジューリングが全く把握できなかったのが残念だった。複数名が関わる展覧会の場合は、それぞれの役割分担を取り決めてもらい、どのように計画を進めていくか考えてもらおう、こちらからも働きかけが必要だった。展示計画全体をコーディネートする学生に常に情報を集約するよう工夫し、お互いのスケジュールや状況を共有できると良いと感じた。	今回の展示は、作家の思いつきによって作品が都度変わる内容になってしまい、終わってみると最初と最後で作品がガラリとイメージが変わってしまった。作家が都度イメージを膨らまし、それを作品に落とし込む作業を繰り返していたが、展示期間内に幾度と作品の変更が生じると、来場者が困惑してしまう恐れがある。展示計画のスケジュールに余裕を持たせる、あるいは、作品が常に変化する展示会であることを事前に告知するなど、作家との展示イメージをきちんと共有できると良いと感じた。
				「例えば(天気の話をするように痛みについて話せば)展」	ポスター、チラシのデザインに関して拘ったため、各所でのチラシ配布分が足りなくなる様子だった。ビジュアル的な部分で興味を引いていたと感じられた。展覧会は、ギャラリーと倉庫部分の展示室2構成となっていた。ハンドアウトをうまく使用し、奥の倉庫への誘導もできていた。作品の一部と触れつつイベント参加に参加できる構成も含め、3人の岩瀬、櫻井、中島のグループによるキュレーション部、イベント構成については、突然の相談もあったが、その分密な連絡体制やグループ連携へと繋がっていた。また、SNSでイベントの情報を学生と協力しつつ周知などを可能な限り行えた。	展示のイベントに関して、後々増えていく印象だったため、ある程度のACAスタッフの適度な立ち合いを検討すべきだった。事前に最大数のイベントについてスケジュールと共に確認をしていく必要がある。それに付随したスタッフの立ち合いに関し、どうしても厳しい場合はCNA担当者と相談の上学生に任せるなど安全性に考慮しつつ動くのがベストと感じた。 搬入・搬出については、ある程度任せられるところは、グループへ任せるなど、様子を見て行えるとういと感じた。 トヨタレンタリースでの予約の際に、レンタルしたトラックに関しての行き違いがあり、急遽当日手配をすることがあったため、2tロングトラックをレンタルする場合は、他レンタカー展へも相談するようにしたい。	展示施工部分については、少し時間がかかったもののコンスタントに進められていたため、余裕を持って作品の設営完了ができた。 展覧会の関連イベント、おはなし会については、参加者、特に一般の方とお話しする具合から好印象だったと感じられる。イベントの数量にもよるが、立ち合いスタッフなど様子を見つつ対応をするなど工夫は今後も続けていければと思う。
				菅原果歩個展「分け入る森」	展示室1(手前部屋)体験型、展示室2(倉庫)小作品から大作品、家具など小道具をアーティストの一室のような感じで整える展示構成がよかった。作家にとって初めての個展であったので、展示部分のサポートについては少し手間をかけすぎた部分があったが、展覧会として成功したのではないかなと思う。	途中まで、写真構成を中心とした展示室1の構成だったが、途中急に展示構成の変更となってしまう、搬入・設営時間が長引いてしまった。ある程度、こちらも設営時間や構成を整った状態でサポートをしたいと感じた。急遽ということもあるので、その場合は適量なサポートを推奨。 個展ということもあり、今までグループ展と異なり外部の協力、助手、学生など設営部分ではサポート枠を強化する必要がある。 スイッチボットなど機材については適宜その場に応じて使用を行うこと。	展覧会自体がとてもよい内容となった。今後の作家としての作品制作へ向けて4年生までの継続的な作品制作へ繋がるとよいと感じている。 展示の構成についてどこまでその場所を使いすぎるのか、思い切って展示レイアウト構成を変えた部分はサポートが大変だったこともあるが、2室を有効的に使用できた展示となっていたと思う。
				深谷春香個展「痕跡器官」	レシートを使用してのインスタレーション展。展覧会会場は1室のみ。その中で原本のレシートの形を変更し形態を模索。 事前にCNAの佐藤さんと深谷さんとの面談を打ち合わせを行うなど、レシートなどを通して作品の理解を深めると共に、展示の搬入最終日にCNAの方へ向けて作品解説やレクチャーを行うなど展覧会への理解度を深められる機会を得られた。 その後、会場にいられる時間を利用して、卒業制作との兼ね合いによりイベント開催は厳しかったが、自身の作品を説明したりする機会を積極的に得られたのは良かった。	インスタレーション作品の展示方法について天吊りやその他、作品形態部分で非常に悩んでいた。助手や教員へ相談するなどしていたが、展覧会の見せ方部分で調整サポートが難しかったが、個人で検討課題に対応するには厳しいと感じるため上記の方も含めて今後も相談しながら進めていければと思う。個展でインスタレーションの部分と、コンセプト部分は、アーティストの筋書きもあるため、その部分について適宜相談をしつつ確認しながら、方向性を整えていくかたちを取る必要がある。少し時間を有するのでその部分を考慮にいれること。 展示について途中で展示の内容を少しブラッシュアップする部分もあったが、その部分はCNA担当者へも共有が必要。作家本人とCNAさん交えてお話しし、今後は驚きますのでお知らせくださいと確認できた。 芳名帳については、見えやすいところへ移動すること。来場者へ向けてのSNSなど配信の強化が必要。(展示時期についても考慮にいたした会期の設定が必要)	インスタレーション展示については、こちら側の体制もサポート強化が必要と痛感した。ただ、学生が主体であることに変わりはないので、ある程度自身で検討するなどサポートの塩梅を検討するべきと思う。広報部分については、イベントがない時についてもフォローできるようにSNSの回数など作家在廊やプレスへ向けてのアプローチを検討する必要がある。
				松下直史個展「L'heure bleue ルールブルー」	松下個展では、短期間の展覧会期間であったが、来場者も多く作品についても研究成果の集大成を彩る作品の展示となった。今回までの研究成果も同時に写真展示することで、来場者によって研究成果の過程に触れることができていた。 また、イベントを開催することで、実際にデモンストレーション、座談会を通して感じられることが大幅にひろがり、参加者がさらに展覧会を楽しめる機会を得ることができた。 また、数回の個展を通してどのように見せるのか、というところに作家本人が課題意識をもって取り組んでおり、イベント時のレイアウト変更については、ゲスト、担当教員と共に意見交換を行いながら臨機応変に対応できておりとても良かった。	今後の課題では、デモンストレーション+座談会がとても好評だったこともありましたが、時間があつという間だったということもありもう少し余裕を持っても良かったのかもと感じた。 展覧会期間が短いということもあり、SNSが他展覧会よりも少なめになってしまった。短い展示の時は、工夫しつつ広報をできればと思う。	松下個展では、釉薬と金属と陶磁の複合的融合によって形作られるものの魅力を探求するという作家自身の研究課題へのアプローチを随所に表出させた展示となった。シンプルな白の表面に、繊細な研究の成果がきらりと輝く。多くの方にみていただけたことや、作家本人からも3回にわたっての展覧会の研究成果の最終がBIYONGPOINTとなり、来場者も異なる人が多く大変勉強になったと話していた。短期間だったが、入場者も集中的に来館され、最終日の魁新聞の掲載も有益だった。作家の在廊日を設けることで、来場者と貴重な意見交換や、また恩師の松永さんとのイベントの開催はとてもよい機会を本人はじめ、スタッフにも提供いただけて素敵な時間となった。参加者もとても良い時間を過ごせたと好評だった。大学内の展示、文化創造館での展示、そして最終的にBIYONG POINTの展示で締め括られた作品が今後どのように展開するのかがとても楽しみである。

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
	単独受託	広報	全国美術高等学校協議会・研究協議会(秋田オンライン大会)のオンライン運営業務	-	全国の美術系高校教員に対して、NPO法人アーツセンターあきたについて紹介する契機を得た。また、当法人が秋田公立美術大学との連絡調整の仲介に入ることで、秋田公立美術大学の広報にも資するプログラムの構築に貢献した。	オンライン開催であったこと、参加教員側の熱量もまちまちであったため、本企画によりどの程度のインパクトを残せたかは未知数である。	
			環境芸術学会第23回秋田大会のエキスカーション運営支援	-	アーツセンターあきたとして、委託者の要望に応じたツアー企画の立案を実施。今後の新規事業に向けた端緒を開いた。	旅行業の資格をもつ職員が担当したが、専門性を大いに生かして案件を成立させた本件について、インセンティブを提供することができず、今後の仕組みづくりにおいて課題であると認識している。	
④ 展覧会や子どもを含む市民向け講座を通じた芸術の普及に関する事業	秋田公立美術大学	広報	サテライトセンター企画展	サテライトセンター企画展共通	コロナ禍でありながら、ギャラリーをもちいた企画展3本、雑がみランド、マーケットと企画をうち、安定した集客を獲得できた。過年度の課題であった、情報発信コーナーの活用についても、今期アーカイブ展を企画・実施することができ、サテライトセンター全体の空間としての活用を進めることができたと思料する。		
				雑がみランド	雑がみランドは4回目の開催。年齢を問わず参加できる創作の場と機会を提供をすることで、創作に興味関心を持ってもらい、美大サテライトセンターの活動を通じて大学を身近に感じてもらう取り組み、フォンテAKITAの6階は子育て世代のファミリー層が利用する施設があり大学の認知度が上がってきている。前回から学生が創作アドバイザーとして参加したことで来場した子どもたちの関心がより高まったのではないかと、単純に創る喜び、楽しさから始まる。スタート。開催で子育て世代への認知度が上がってきたと感じる。毎年来場された方々も多く、コロナ禍で時間制限、人数制限を設けて開催したにもかかわらず、「また来ました。」「楽しかった。」「子供がこんなことをできる、考えていることを知れて良かった。」「親の方が楽しみました」など多くの声が寄せられた。自ら工夫する姿が見られ工作の中で試行錯誤する喜びを感じてもらえたと感じる。開催期間中何度も来場される方も見られ需要の大きさを感じた。参加者の年齢に応じて創作するものが異なるが、他世代で交流が生まれ工夫する姿も見られた。素材を雑がみだけにとらわれず、もう少し範疇を広げていきたい。	コロナ禍で入場制限を設けたが先着順としたため、いっぱい入れないかもしれないと躊躇したとの声を聞いた。今後は入れ替え制や入場制限を無くす方向で検討したい。 素材集めとデモンストレーターについて多方面にコミュニケーションを取り子供だけでなく大人も楽しむ創作の場としたい。 幸いにも参加者が会場で大きな怪我をするトラブルはないが、今後のリスクが全くないわけではない。参加者に注意喚起は行いがスタッフの見守りも重要だと考える。道具を使えない大人や子どもを時折見かけた。道具を使う時の手の動きや力加減がわからないようだ。怪我の元になるので、スタッフが道具の正しい使い方を示している。	4回目の開催で子育て世代への認知度が上がってきたと感じる。毎年連続で来場された方々も多く、コロナ禍で時間制限、人数制限を設けて開催したにもかかわらず、「また来ました。」「楽しかった。」「子供がこんなことをできる、考えていることを知れて良かった。」「秋田に里帰り中です」などと笑顔で多くの声が寄せられた。開催期間中何度も来場される方も見られ需要の大きさを感じた。また、参加者だけでなくメディアの取材も毎年レポートしていただけた。参加者の年齢に応じて創作するものが異なるが、他世代で交流が生まれ工夫したり、協力して一つのものを作る姿も見られる。素材を雑がみだけにとらわれず、もう少し範疇を広げていきたい。 使いたい道具がない、あったらいいのと思う材料や素材がない、など自由に作って遊ぶと謳いながら、実は不自由な空間。人数制限、時間制限がある。キリやカッター、輪ゴム、糸、など無いものも多い。なければ知恵を使えばいい。代わりになるものを探す。作る。代用する。工夫する。応用力を鍛え、想像力を刺激する場になってると考える。実際に来場する子供達の想像力に驚くことがある。見立てあそびを遊びを難なくやっけてのける。成果物を持ち帰るので、会場にはなかなか見栄えの良いものは残らない。作りかけのものを残して行く。それを使ってまた誰かが別のものを作る。それが、また良いのかも知れない。
				卒業生シリーズ Vol.9	卒業生シリーズにおいて工芸をモチーフとした企画展は初めてであり、大学の取組みの多様性紹介に貢献した。	作品がコンパクトであることからギャラリー空間をダイナミックに使うには至らず、また矢留彫金工房の紹介展示のように受け止められることもあったため、展覧会の企画づくり・空間づくりにおいては改善の余地があったと思料する。	
				情報発信コーナー企画	秋田公立美術大学10周年を見据え、大学設立の2013年からの10年間の秋田県内の文化芸術の動向や、秋田公立美術大学の出来事、アーツセンターあきたに関わる出来事の情報を整理して、年表という形にまとめて発表することができた。	参加者が情報を加筆修正する参加型の展示としているが、参加者を呼び込む仕掛けが足りず、効果的な運用ができていない。	
				アニメーション展	秋田公立美大でアニメーションを専修することはできず、他領域の表現を学ぶ過程においてひとつの表現として取り組む学生が多い。技法を学びづらい環境のなかで、アニメーション作品展出展を目標に作品を完成させていく過程を目の当たりにし、確実に成長しているのが見てとれる。昨年度から引き続き2回目の開催だが、昨年度出展学生の技術や表現の向上も見られた。目標をもって取り組み、教員にアドバイスをもらい、展示空間をイメージすること、さらに他学生と交流することで刺激になっていると考えられる。加えて本展は学生アニメーションの祭典「ICAF」の前哨戦的位置づけであり、今年度は秋美作品がはじめて会場で上映され、多くの観客に鑑賞してもらえたことは大きな力になったと思う。	技術をほぼゼロの段階から学ぶ学生もいるため、打ち合わせや作品完成、展示計画に時間がかかること。アニメーション専修ではないため学生がアニメーション制作にさく時間がとりにくいことなどが課題として挙げられる。また、展覧会広報で学生にポスターと会場バナー、ハンドアウトのデザイン制作を依頼しているがチラシやキャプションなどまでの進行管理は難しい。アニメーションをインスタレーションするには機材が不足しており、教員の私物を借用しなければ会場設営が不可能であることも課題として挙げられる。	出展からデザイン、映像制作まで、学生11人の進行管理はいつも難しく感じるのだが、この2〜3か月ほどの間にも成長を感じることが多く、それが実感としてあることが担当として嬉しい。学生の可能性を感じる楽しい時間でもある。課題は多いが着実に力をつけていく過程を伴走できることで、次年度への展開を感じ取ることもできる。今年度はICAF会場にて秋田公立美大の作品が初めて上映され、選抜学生にとっていい刺激となった時間を共にできたことは感慨深い。
卒業生シリーズ図録制作	卒業生シリーズのアーカイブ本を2023年度に発行するにあたり、全体構成、仕様検討、原稿依頼、サンプル作成を行った。卒業生シリーズ展覧会のアーカイブであると同時に、秋田公立美大の卒業生が現在、どのような制作をしているか、秋美の教育の成果をまとめたブックとなるよう、岩井教授、石倉准教授、福住准教授に原稿を依頼した。	印刷に関わる費用をどう工面するか予算的な課題と同時に、販路をどうするか、流通に乗せることができるかの課題に直面している。加えて、大学予算での無料のアーカイブ本ではなく売り上げる書籍として卒業生シリーズをどう構成していくかを2023年度に検討した上で、制作しなければならぬ。	これまですべてのビジュアルデザインを担当した越後谷洋徳さんデザインによるアーカイブ本は念願ではあったが、これを作る書籍として構成するにはさらに検討が必要だろうと実感している。大学広報であると同時に、VOCA賞をとった永沢碧衣さん、推薦者である石倉准教授、美術評論家の福住教授の原稿を活かし、秋美の教育は何か、何を目標としているかを問える書籍としたい。				
			AKIBI ARTs MARKET 2023	2年ぶりの開催となり、2日間で高い集客を得ることができた。学生にとっても、地域の人々とコミュニケーションする機会を創出することができ、有意義だったと思料する。			

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
	秋田公立美術大学	教育	子どもアート Lab.	子どもアート Lab.共通	<p>「NEOびじゅつじゅんびしつ」植物ってどんなかたち？」のプロジェクト型ワークショップ2本立てを行う。 それぞれに興味関心の異なる子どもたちが参加した。</p> <p>1、NEOびじゅつじゅんびしつ 5/5に開催した事前説明会の参加人数は6名(子ども2名、大人4名)となったが、夢募集は10件と想定していた数が集まった。また、メンバーには、前年度とは異なる子どもたちからの参加申込みがあり幅が広がった。 夢の企画は、「A みんなでロケットをつくって空へ飛ばしてみたい!」「B 自分たちが小さくなった世界をプログラミングで作って、ミニチュアを工作したい!」が選ばれた。共に一般的には理系分野に該当するが、メンバーの得意不得意を超えた協力が見られた。それぞれの夢が、夢を叶えるために何を考えていかなければならないかを知る経験となった。 両プロジェクトに参加した子どもたちは、夢を実現させ、それぞれに充実した時間を過ごすことができたことを、ヒアリングやアンケートにて確認した。</p> <p>2、植物ってどんなかたち？なぞって、えがいて、いけてみよう! 全3回WSは、参加申込者が多数となり抽選となった。 植物の観察にはじまり、スケッチや採集を通して、植物そのものを素材にそのものを生かした描画、スタンプによって、8枚の紙に作品を制作した。 10x3mの巨大なロール紙に描くというダイナミックな試みに、参加した子どもたちも「すぐに描きたい」「次になにをするの」など声が上がリ、ワークショップに対して意欲的な表情を多く見ることができた。 最終回は子どもたちから「とても楽しかった」「不思議な空間で緊張した」「2度と味わえない体験ができた」などの言葉をから新規のワークショップではあったが、活動的なワークショップができた。</p>	<p>1、NEOびじゅつじゅんびしつ 課題1: 教育的指導のタイミング、適度さ プロジェクトA活動内において、子どもたちのメンバーと一緒に活動せずにバラバラになり、どこにいったかわからなくなるなど活動へ支障をきたした。また、それに準じて夢実現へ向けての意欲の低下と活動見られるなど散見された。またプロジェクトBは、PCを通じた作業に陥りがちだったため、顔を合わせた話し合いが少なかったことが要因か、コミュニケーション不足に陥り、うまく感情がコントロールできずに手が出てしまうことがあった。それぞれの状況に応じ、Labリーダーの柚木先生からの指導、スタッフからの仲裁が入るなど前年度よりは比較的大人側が口を出してしまうところが多々あった。 対応策: 適宜子どもたちの様子や夢の進捗状況に応じて、見守り師が状況確認と情報共有を行い、子どもたちへそっと声をかけたり、傍から離れて見守ることに徹するよう心がけた。今回参加した見守り師たちからは、「がんばってやってみようよ」「どうしたらできるかな?」など、子どもたちへ夢を応援するかたちで声かけをしたものの、口を出さずしていたのではないかと悩みを吐露する場面があった。見守り師同士で積極的に情報共有と相談を行いその場でどのように子どもたちと接するかを検討し合える場をつくれるように今後へ生かしていきたい。 課題2: 文化創造館貸し出しの手続き 2022年度の文化創造館貸し出しは、後援または共催などの確認に時間がかかってしまった。 対応策: 時間がかかることも分かったため、今後は早めに確認を相互で行うようにする。</p> <p>2、植物ってどんなかたち？なぞって、えがいて、いけてみよう! 課題: ワークショップの時間配分 1,2回目は、描画とスタンプの制作活動時間を午前中のみしていたが、いずれも活動時間の30分をオーバーした。3回目は、午前・午後に分けて制作活動と鑑賞を分けていたが、子どもたちがかけた植物を、8枚の紙で見立てた四角い空間の中に入れて体感する時間が少なくなってしまった。 対応策: いずれも保護者の許可を得て、時間を延長し作業時間を確保。Labリーダーとの相談により子どもたちの集中力の保てる時間とバランスによって検討と変更が必要。</p>	<p>1、NEOびじゅつじゅんびしつ 学生を含む大人側(保護者も含めて)は、夢へ向けてのサポートをどこまでできるのか?を改めて考えさせられるものとなった。 見守り師も夢が叶うまで大変だったが、傍でサポートをしてしまっていたことに罪悪感をいだきつつ子どもたちの夢がそれぞれ無事に叶ってよかったと思う。</p> <p>2、植物ってどんなかたち？なぞって、えがいて、いけてみよう! 回が増すごとに、子どもたちの制作意欲の高さと集中力・観察眼が上がっていく様子がみられこちらも大変嬉しかった。 活動中は、Labリーダーの瀬沼先生の話聞きとり、一度考えて制作を行うことが回ごとに増え、子どもたちの成長が感じられた。サポートの学生たちも子どもたちに寄り添って制作の手助けやアドバイスをしていた姿が見られ、共に子どもたちと一緒に楽しめる空間となっておりよかったと感じている。</p>
				NEOびじゅつじゅんびしつ	<p>Aチーム、Bチームの夢が2つ共に叶えられたことは、本当によかったと感じている。とても濃い4日間だったのではないだろうかと思うが、子どもたちによってそれぞれの成長もスピードも違いがあり、その中で今回の件が、少しでも課題へ向けての意識の向け方などへの気づきに繋がっていければと思う。</p>	<p>新型コロナによる作戦会議(1回目)のオンライン開催は、対面で行うべきであったと感じている。チームによっては休みや怪我による辞退もあったため、可能な限り初回の作戦会議より対面でコミュニケーションを図れるように可能な限り配慮する。子どもたちはすぐに仲良くなるが、1日でもあるなしによって距離感の縮まり方が違うのではと感じられた。 Aチーム: おそらくリーダーとなりそうな子が、怪我による離脱もあり、少し夢へ向けての行動が停滞する時間があった。1人の子が主体的に動かざるをえない状況が多々みられたので、子どもたちの様子をみつつ適宜、教育的指導が行われた。ロケット打ち上げに向けて、少しずつ相手を思いやれる部分もできていたが、危ういところもあるなど目が離せないところがあった。</p>	<p>子どもたちの夢が叶ってよかったのだが、チームごとに子どもたちの個性もありつつ様々なことが起こった。見守り師として子どもたちと距離を測った上での適切な対応、判断も瞬間的に必要とされた。両チームに関しては、保護者の運営理解も得られていたため、その中でプロジェクトを進められ、最後の発表会では良い経験ができたという意見のアンケートも得られた。Aチームに関しては、直前の申し出にも関わらず秋田大学の平山先生のロケット打ち上げの協力を得られたこと、またBチームの発案者の保護者から、今回考えるきっかけとなったこと、どのようにすれば円滑に夢を実現させることができるのかへの熟考へ繋がったことを感想でいただけ、Labリーダーも含めて嬉しかった。</p>
				瀬沼健太郎回	<p>制作と鑑賞、見立てる世界を子どもたち自身の手で作成し、展示され見立てられた植物の世界は、全3回を通して全員の手によって創られた植物のドローイング群である。植物だけではない世界へ目を向け、子どもたちの内面的な植物を通して捉えられる儚さであったり、自然における生命の力強さであったり、そうした言葉にするには難しい世界を最終的に植物の囲いければなの茶室のような空間の中で味わうことができた。創り上げた空間の中で3分ほど自由に過ごすことができる中で寝っ転がったり、座って目の前のいけられた植物をじっと見つめたり、描かれた植物の世界は唯一無二の空間をその時だけ子どもたちにも言われぬ感動や感情を呼び起こすきっかけになったのではないかと感じている。</p>	<p>午前中のみWSに関しては時間配分超えることはあったが適切な時間だったが、最終の植物をいけてみたところでは、少し時間が足りなかったと反省。</p>	<p>当初、1つのWSを行う予定だったが、全3回を通して、植物の様々な側面を体感できる連続講座となった。 最初、あるいは筆致で描かれた瑞々しさがまだ残る晩夏の季節が表現された植物のドローイング。次の回では、子どもたちは秋の植物の儚さを繊細に感じたままに葉の落ちていく姿をスタンプで表現するなど、観察眼が養われていることに驚きを隠せなかった。みることだけではなく、無意識の内に感じることを自然と身につけられていた。最終回は、大きな紙の中で躍動する描かれた植物にみ立てられた空間の中、本物の椿の枝を生けて対峙する。その時間は、かけがえのない時間になっていたことだろう。子どもたちが創り上げた動的なはずの植物のドローイング作品が、静謐で特別な空間を立ち上がらせた、普段は味わえない空間が整う。終えた後のなんとも言えない不思議な表情を浮かべながらもやりきったという表情の中、言葉少ない中でも2度と味わえない空間にいられたと、子どもたちから最後につぶやかれた言葉とともに開催できたワークショップに感謝。</p>
⑤ 秋田公立美術大学の地域連携や社会貢献、広報活動等の支援に関する事業	秋田公立美術大学	広報	高校生クリエイティブワード		<p>何でも、アリ。というキーワードを通して前年度と変わらずにさまざまなジャンルの作品の応募があり、応募件数は、149件(34都道府県、1海外)となった。 これまでの賞に追加して協賛企業賞を設けることで、企業独自の賞品や秋田の特徴を示す賞品を提供することができた。また、入賞者以外も対象とする審査員特別賞を設け、各審査員の視点を示す機会を作った。 広報部分に関しては、公式ホームページ SNS内でも掲載を行いつつ、応募まで何日というカウントダウンを行いPRにつとめた。また、昨年度受賞者有志からの申し出により別の告知動画が作られ、公式でも配信した。 交流会では、1名を除く入賞者が出席し、自身の活動や他にしていることなど様々なことを審査員の質問に応えながら話し、終始和やかに進んだ。応募動画では掴み取れない入賞者の想いを知ることができ、また高校生だけの交流会では連絡先やSNSの伝え合いがあったり、進行したり、陰のファシリテーションをする生徒が出てくるなど、受賞者の主体性が垣間見られる場面が多く合った。</p>	<p>何でも、アリ。というキーワードを通して前年度と変わらずにさまざまなジャンルの作品の応募があり、応募件数は、149件(34都道府県、1海外)となった。 これまでの賞に追加して協賛企業賞を設けることで、企業独自の賞品や秋田の特徴を示す賞品を提供することができた。また、入賞者以外も対象とする審査員特別賞を設け、各審査員の視点を示す機会を作った。 広報部分に関しては、公式ホームページ、SNS内でも掲載を行いつつ、応募まで何日というカウントダウンを行いPRにつとめた。また、昨年度受賞者有志からの申し出により別の告知動画が作られ、公式でも配信した。 交流会では、1名を除く入賞者が出席し、自身の活動や他にしていることなど様々なことを審査員の質問に応えながら話し、終始和やかに進んだ。応募動画では掴み取れない入賞者の想いを知ることができ、また高校生だけの交流会では連絡先やSNSの伝え合いがあったり、進行したり、陰のファシリテーションをする生徒が出てくるなど、受賞者の主体性が垣間見られる場面が多くあった。</p>	<p>【今年度について】 たくさんの応募があったこと、また自分の欲求に突き動かされたと思われる応募は大変嬉しかった。活動をする高校生の姿も全体を通してとても好感が持てた。 継続事業の審査員については前年度からのリサーチや打診が必要であり、それに合わせた広報のタイミングや方法の検討を進めることが、進行のうえで非常に重要であると感じた。 協賛企業賞や審査員特別賞など賞の増加に伴う柔軟な対応の仕方や次年度の賞の内容を協賛企業等や審査員と調整していくことなど、次のステップへ向けての対応を心がける。 【次年度に向けて】 前年度のうちから審査員を決定した上で、広報部分や高校生へのアプローチ効果に向けて有効な方法を探る必要があるが、次年度は審査員をすでに確定し、広報手段やコンセプトについて検討を始めている。</p>

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
	秋田公立美術大学	広報	大学広報	大学広報	<p>アートセンターあきたが企画・制作する大学の社会連携事業については、引き続き安定的に地元メディアを中心とした露出を確保することができた。</p>	<p>一方で、それが一般市民の認知・理解度の向上や地域の専門家の評価向上に寄与しているかという点、その点でのインパクトはまだ弱いと推察する。加えて、専門メディアへの露出は今年度は担保できなかった。</p>	
				大学案内制作2022-2023	<p>教員及び事務局から昨年度の課題などをヒアリングして制作を遂行したため、総じて満足度が高いものが仕上がった。</p>	<p>制作スケジュールどおりに進行せず、納期に遅れが生じた。</p>	
				大学案内制作2023-2024	<p>広報委員会からの要望に則り、通常126ページで制作をしていた大学案内を大幅に縮小し、48ページのパンフレットの形状に編集し制作を進行した。</p>	<p>スケジュールの進行管理に不備があり、制作スケジュールどおりに進行せず、秋田公立美術大学から苦言を呈される事態となった。</p>	
⑥ 芸術に関する技術指導に関する事業	秋田公立美術大学	教育	デッサンスクール	-	<p>各回、モチーフと講師が異なる1日単位で受講する全6回のデッサンスクール。静物の鉛筆デッサン基礎を学ぶ講座となっている。受講の対象を中学1年生から高校3年生までとしたことで目標を早期に立てている受講生へ貢献できた。学年が異なってもデッサンに対する姿勢やスキルに年齢はあまり影響がなく、受験期になってから慌ててデッサンを始める初心者が多い中、早期にスタートした受講生の成長の度合いに驚かされる。</p> <p>また、各回の講師の専門領域が異なることで画一的なデッサン指導に偏らない利点がある。デッサンの基本は同じだけれども表現方法が異なり、指導方法にも違いが見られる。</p> <p>デモンストレーターを各回に配置したことでデッサンの良い手本を示せた。また、デモンストレーターを務めた学生がどんな専攻でどのような作品を制作しているかなどを紹介することで受講生の近い目標となった。</p> <p>昨年度から継続の受講生が8名、今年度も複数回の参加を希望する申し込みがあった。</p> <p>第1回デッサンスクール7月31日(日)10人(中学3年2人、高校1年2人、高校2年1人、高校3年3人、通信4年1人、既卒1人)</p> <p>第2回デッサンスクール8/28(日)10人(中学1年1人、中学2年1人、高校1年2人、高校2年2人、高校3年3人、既卒1人)</p> <p>第3回デッサンスクール10/16(日)9人(中学3年1人、高校1年2人、高校2年2人、高校3年5人、既卒1人)</p> <p>第4回デッサンスクール11/6(日)10人(中学2年1人、中学3年1人、高校1年2人、高校2年2人、高校3年4人、既卒1人)</p> <p>第5回デッサンスクール12/4(日)10人(中学3年5人、高校1年1人、高校2年1人、高校3年3人)</p> <p>第6回デッサンスクール1/22(日)10人(中学2年1人、高校1年1人、高校2年4人、高校3年4人)</p>	<p>受講のキャンセル対応で開催日の前にリマインドすることで当日のキャンセルが回避できたので今後も対策していければ良い。</p> <p>各回、定員を設けているためキャンセル待ちが出ていたが今年度は急なキャンセルに対してキャンセル待ちの方へ連絡が比較的スムーズで欠席は1名にとどまった。</p> <p>コロナ禍でのデッサンスクール開催で幸いにも休講にはならなかったが、これから起こりうるリスクとして講師やデモンストレーターの体調不良での急な欠勤に対して、アートセンタースタッフが講師代行するなど対応を講じたい。</p> <p>教員や助手、学生が多忙のため、デッサン指導の講師とデモンストレーターの確保が今後の課題。</p> <p>美大受験対策とした受講生とそうでない受講生に対する課題の出し方に工夫が必要か再考する必要がある。各回で受講生の学年に応じてモチーフの種類を変更して対応したが個人の習熟度にもよるので学年だけでは判断しづらいところ。</p>	<p>デッサンスクール5年目を終えて1日単位で開催することがさらに定着して来たと感じる。中高の先生からの紹介が多く、進路相談を担当する学校の先生に周知が届きつつある。</p> <p>バリエティに飛んだ講師を迎えることで指導法も異なる。受講生もさまざまな個性を持つため、倫理的な指導を好むタイプと感覚的な指導を好むタイプとさまざま。</p> <p>1回だけの受講で1枚のデッサンは完結はしているが、2回3回と受講することでより理解が深まることを期待している。講座終了後、30分の自由な質問時間を設けることで講師やデモンストレーターとのコミュニケーションはデッサンのアドバイスに留まらず、充実した時間になっている。</p> <p>前年度に受講した生徒がリピーターとなり、今年度も受講する姿が見られた。中1からの参加者も多く見られる。また、遠方からの参加者も3年生だけでなく高校2年生の参加もあり関心の高さが伺える。山形から熱心にレポートする参加者も見られた。潜在的なニーズがもっとあるのではないかと考える。地域によっては高校の授業で美術がなく学校に美術の教員が不在という環境でデッサンを習える場所が求められている。県外参加者、県南、県北など遠方からの参加者が昨年より増加傾向にある。</p>
	秋田公立美術大学	教育	素描Lab	-	<p>昨年度に続きコロナ禍の中で他地域から広く集まる講座の開催について懸念もある中、人数制限を設けて実施できた。7月を体験期間とし、8月から本格的に実施スタート。合評会講師には各回異なる人選をして、異なる指導方法に触れることで幅を持たせた。</p> <p>各個人ごとにデッサンに向かう目的や姿勢に違いはあれど、目標を持って自習する姿が見られ、自ら質問したり、サテライトで保管している参考作品をもとにデッサンの質の向上を求める姿があった。技術的成長とともに進んで行うことで精神的成長も見られた。</p> <p>2月会員から3月の継続希望の要望が寄せられ3月以降も継続することになった。会員は受験該当学年もいるが同程度下学年もいてニーズがあった。保護者や学校関係者と思われる方からの問い合わせが年間を通じてあり美術系に進学することの情報を求められている。</p> <p>秋田公立美術大学合格者 1名判明(高3会員5名中、東北芸術工科大学合格1名、浪人(素描Lab継続)1名、残りの3名は進路不明)</p> <p>会員20名(内訳:中学3年7名 高校1年3名 高校2年3名 高校3年5名 通信制高校4年1名 卒業生1名)</p> <p>7月～2月会員延87名(内訳:7月13名 8月14名 9月10名 10月11名 11月11名 12月10名 1月7名 2月6名 3月5名)</p> <p>昨年度からの継続会員3名</p>	<p>日々の自習は各自の予定のもとに決められて通ってくるが、合評会については決められた日程で行うため参加できない会員が一定数いた。模試や学校行事、コロナの学校閉鎖、学級閉鎖の影響等理由はさまざま。また、他者とのコミュニケーションを苦手とする会員があえて人の集まる合評会を避けているということもあった。そういった会員へのアプローチについて個別にデッサンにアドバイスコメントを残すなど行った。</p> <p>また、応募者に受付の確認事項連絡を行うがメール・電話などつながりにくく対応に苦慮した。返信方法や応募方法を検討した結果、連絡の取りにくい件数は減少した。会費納入期限の遅れが毎月あるので期限の前にリマインドメールを送るなど対策を講じた。</p> <p>指示待ちで自習に慣れない会員に対して、どのようなアプローチが望ましいか検討したい。前のめりな保護者に対して消極的な会員という構図から短期間で退会する会員も一定数いるため、初日の対応に課題があるので検討したい。</p>	<p>長引くコロナ禍で自習に来ることもままならない状態が続いた。会員がコロナに感染した、家族、学級閉鎖などで自習に来ることが困難な状態が続く中でも自習に来れば集中してデッサンに取り組む姿が見られた。合評会の日程の連絡と出欠確認をリマインドすることで出席率が向上した。欠席の会員にはデッサンを預かりコメントを残すことで対応。合評会講師がコロナに感染し、開催が危ぶまれたがサテライトのスタッフで対応。合評会で会員が集まる機会は各会員の刺激になり意識の変化が見られた。進路は美大ではなく、ただ絵を描くのが好きで描く場所が欲しくて来ていた会員が合評会に参加したことで意識が変わり美大進学を目指すようになり驚いた。遠方に居住しているため月に1～2回しか来ることができない会員もいる。回数が少なく、滞在時間も限られる中でも意欲はあるので自宅でもできることをアドバイスしていきたい。</p> <p>保護者からの声はどこまで学べば良いかわからなかった。というもの。保護者、学校の先生、保護者の知人からの問い合わせも多い年だった。年度ごとに会員のタイプは異なり、会場の空気も変化する。今年度はややおとなしい印象で受験を目標としない会員がいたのも今年の特徴。2月の会員から3月以降の継続の希望が多く出されたことで通年開催と移行した。</p> <p>素描Labが受験対応だけにとどまらず、美術の多様性に触れる機会の情報を提供し共有、共感する場となりたい。</p>

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
⑧ 公共施設等の管理・運営事業	秋田市文化創造館	指定管理	空間の提供	フリースペース活用	<p>【フリー・オープン・デイ】</p> <p>5月のゴールデンウィークと3月の開館記念日に加え、近隣の集客イベントに合わせて館独自のコンテンツを実施した。近隣の集客イベントの動向を捉え、タイミングを見て取り組むことで、これまで館に訪れたことのない層への来館を促した。</p> <p>【日常の試み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フリースペースとして来館者に居心地よく過ごしてもらえるような配慮に加え、館の取り組みや事業の進行状況をオンゴーイングで可視化、来館者が多いタイミングを図り展示する事により、立ち寄り利用の方に関心を持ってもらうきっかけづくりを行った。その成果として、文化創造館の施設の特性を効果的に周知とともに、展示物に対して総合案内に相談へ来る、広報物へのコメントを頂くなどのフィードバックをもらうきっかけにもなった。 ・「音の日」「キッチン利用モニター」「ヨルカツ」などのお試し利用のプログラムでは、館の利用促進を図るプログラムであったが、同時にプログラムを利用した人同士に繋がりができるなどの効果が見られた。 ・日常的な空間への配慮及び来館者へのホスピタリティにより、来館者の満足度を得られていることがわかる。 	<p>【フリー・オープン・デイ】</p> <p>参加者や利用者と共に作る集客イベントを目指しているが、参加者と一緒につくる部分の多様性や効果を図る指針を設定する必要がある。また、館のPRを行った効果を図る事業アンケート調査も必要だと感じた。</p> <p>【日常の試み】</p> <p>来館者向けのアンケートの回収率を上げるような試みが必要。また、アンケート以外の意見・要望をコメントできる評価指標を図るための仕組みの整備が必要だと感じた。</p>	<p>【フリー・オープン・デイ】</p> <p>取り組み内容の計画が直前に設定され、実施運営スケジュールがタイトになる現状がある。状況に応じた柔軟な対応も必要だが、今後は計画的な実施を目指したい。</p> <p>【日常の試み】</p> <p>館の利用状況や周辺地域の催しに合わせて柔軟に展示やプログラムを実施できる枠組みとして、次年度は工数をかけずに取り組めるように配慮できればと感じた。</p>
				事業パートナーとの連携	<p>イ) 関連イベントの共同企画、開催(千秋ノ市)</p> <p>これまでの事業や「秋田の人々」で取材を行った方などにブース出店いただき、秋田市内で活動する作り手や作家が集まるマルシェイベントとなり、地元のクリエイターとの連携に取り組めた。出店者への簡易アンケートより実施した満足度が高く、空間や立地・文化創造館の雰囲気を楽しんで、次回もぜひ参加したいという意見であった。</p>	<p>ア) 物品販売や飲食提供により来館動機を高めるショップ・カフェの運営</p> <p>2022年度内でもミルハスオープンや新型コロナウイルスによる規制緩和など、時制や周辺環境の変化が大きくあった1年であった。今後も状況の変化を日々とらえるために、来館者の動向や数値分析は連携しながら実施する必要がある。</p> <p>イ) 関連イベントの共同企画、開催(千秋ノ市)</p> <p>出店者へのアンケートや当館スタッフの意見として、2階へのアクセスの悪さ・2階でも開催していることが来館者に周知されていなかったという指摘。また、「マルシェイベントはワンフロアでの開催が良い」という意見が出店者よりあった。</p>	<p>イ) 関連イベントの共同企画、開催(千秋ノ市)</p> <p>企画を業務委託したノ市実行委員会(株式会社SeeVisions)が実施するマルシェイベントや「千秋ノ市」を楽しみにしている層は一定数おり、費用対効果を考えると年に1回程度文化創造館の取り組みを知ってもらう機会として実施できればと感じる。</p>
				ヨルカツスペシャル いさな雪まつり	<p>秋田県の「新たなナイトタイムコンテンツ創出事業」として、ジェイアール企画から協力をいただく形で実施した。</p> <p>秋田市文化創造館では厳冬の夜という最も利用が少ない期間のポテンシャルを引き出す契機となった。</p> <p>雪で囲まれているから利用が制限されてしまうのではなく、雪があるから市民の創造性が引き出されるという道筋を作れたことは、文化創造館の役割としても大きい成果を残したと考える。</p> <p>ジェイアールがまとめたアンケート結果では、今回のイベントについて、積極的に進めたいかという問いに95%が「はい」と答え、満足度がとても高かったことも伺える。来館者数も屋外エリアのみだけで1000名おり、多くの市民が文化創造館に関わりを持つきっかけをつくることに寄与した。</p> <p>また、ミルハスやなかいちなど他イベントと少し時間をずらして開催したことで、中心市街地に来た方々が長く滞在する流れも創出した。</p>	<p>県からは今後も継続したナイトタイムコンテンツを創出していくことを課題としてあげられているため、それを今度は予算なしで実施しなくてはならない。</p> <p>指定管理事業としてどのように取り組むかは検討していく必要がある。単にイベントとしてその場を盛り上げる形ではなく、市民が創造する機会となるように企画を組んでいくことが必要。</p> <p>天気に左右されるイベントということもあり、直前まで雪が思うように積もらなかったことで状況が読めず、結果的に成功したが、行き当たりばったりな状況を生んでしまったことは反省点。</p>	<p>非常に短い準備期間ながら、支援チームの場の演出力、市民へのサポート力が遺憾無く発揮された機会となった。</p> <p>昨年度は雪が積もったまま放置されてしまった屋外エリアだが、雪像づくりの公募をすることで、これまで文化創造館に関わりのなかった方からの応募があったり、1週間程度、数名が雪像を作り続ける風景を作れた。また作っている方々同士でコミュニケーションが自然と交わされたことも印象深い。</p>
秋田市文化創造館	指定管理	機会の提供	ラーニングプログラム「未来の生活を考えるスクール」	<p>・3名で担当したことで、テーマやアウトプットのバリエーションを広げることができた</p> <p>第8回については、vol.2,3とこの先も続けてほしいという声が多く挙がり、体を動かしながら学び考えることへの需要が感じられた。少人数で複数回のワークショップを行ったこともあり、参加者それぞれがテーマを噛み砕き、深い思考に繋がっていた。</p> <p>・学び、出会いの機会として機能した</p> <p>第7回では、約40%は文化創造館でのイベントに初参加という回答があった。年代も10代～80代まで幅広く、映画上映が広い間口として機能したように思う。</p> <p>第9回は、「まちづくり」というテーマに対して「終わり」、「続けないこと」という新たな視点に加え、アンケートでも好評を得た。</p> <p>第10回は、参加者間で、継続してZINEを作りたい、文化創造館のリソを来館者が使える仕組みを作りたい、等の自主的な動きが生まれる予感がある。</p> <p>参加者の声からも、秋田県内の他の公共施設では提供していない内容を実施できたのではないかと感じる。</p> <p>※参加者の声</p> <p>「まだまだ保守的な家庭観やジェンダーイメージをもつ人が多い秋田において、新しい家族のかたちを考えさせてくれるような会だった」</p> <p>「町内会、民生児童委員協議会では高齢者ばかりでの集団です。何も変わらず、それで良い、そんなくの集団、ジェンダーギャップも大きい。疲れ果てて、未来を見てみようと思ってきました。」</p>	<p>・アクセシビリティ</p> <p>「スクール」に限らず施設運営全体の課題ではあるが、背景や価値観の異なる多様な人々が参加しやすい環境について常に考え続けねばならない。小さい子どもと参加できる環境、身体障害があっても参加しやすい環境、言語など。各回で手話通訳と託児サービスは設けたが、その情報が行き届いていない感覚があり、当事者へのヒアリングが足りなかったと感じた。</p> <p>・参加人数</p> <p>第8～10回は定員に達せず、企画意図とより広く伝わるよう説明すること、より積極的に県内メディアにアピールすることが必要。</p>	<p>全体を振り返ると、すでに「スクール」に参加したことのある層が多く、映画上映が今まで文化創造館に来なかった層との新たな接点になっていたように思う。</p> <p>第9回は国際教養大の工藤氏がゲストだったこともあり、参加者層として少なかった学生の参加に繋がった。</p>	

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
				コミュニケーションプログラム「カタルパー」	2022年度は創造館スタッフと市民の方合計して71回のカタルパーを実施することができた。また、店主や参加者からの口コミが広がり、「カタルパー」という事業を広く周知することにつながった。自分のやってみたいことに気軽に挑戦できるフレームとなった。カタルパー体験後、自身でイベントを企画して実施するなど施設利用などにもつながっている。	カタルパー一日店主の希望者の受付が雑多になってしまう場面があったため、受付対応の簡略化が必要なのではないか。	活動を初める際に負担となってしまうチラシの作成や開催時間などの制限、創造館のSNSを使った告知などを創造館で担うことで、広報や手軽挑戦することのできる取り組みとすることができたのではないだろうか。一日店主によるカタルパーを継続しつつ、引き続き小さく始めることのできる「手軽さ」をそのままに出張カタルパーなど、創造館外での取り組みにもつなげていきたい。
				コンシェルジュサービス	ア)館内ツアー＝館内ツアーのプログラムを参加者の年齢層や興味関心に合わせた内容にアレンジしながら、市広報公聴課主催の施設見学会、学生を対象にしたレクチャー付きの見学会などに対応することができた。 イ)利用者相談会(または懇談会?)の開催 5月3-5日に「ご利用相談カウンター」として実施したほか、総合案内窓口にて随時利用者の相談に応じる体制を管理チーム、支援チームで連携し対応することができた。 また、藤館長による市民との対話の場として「なににする?かえるくんとそうだん」を4回開催した。毎回数名程度の参加だが、参加者の半分以上が新規参加者であり、文化創造館の考え方に触れたり、関わりしるを作ることができた。 ウ)テクニカル勉強会(照明・音響・映像・オンラインなど) 当館スタッフの技術向上を主な目的とした技術研修を計3回にわたり開催した。	「かえるくんとそうだん」で話されたこと、実際に何かやりたいという参加者からの声に対して、施設利用などに展開するケースは少なかった。もやもやした気持ちを次につなげる仕組みづくりが必要。	来館者への対応力という観点から言うと、職員間で一定のレベルを維持するまでになったかと思う。それはツアーや見学/受付/当日対応、そして技術学習などの積み重ねによるものである。このレベルを維持し、さらなるレベルアップを図ること、来館者ばかりでなく、職員が出向く形での相談会なども次年度は取り入れたい。
秋田市文化創造館	指定管理	創造支援	創造支援共通	創造支援共通		相談を受けた全15件のうち、前年度のパートナー団体は4件。また美大関連が6件であった。	文化創造館の創造支援事業についての情報がまだ普及できていないという課題があり、事業紹介パンフレットを制作した。このパンフレットを活用しつつ、次年度は事業の紹介も積極に行っていきたい。
				企画の共催・支援	2022年度は、15件の企画の相談があり、審査の結果、共催＝4件、活動支援は9件(うち1件は決定後辞退)を採用し、不採用が1件という結果だった。 内容については下記リンクのとおり。 https://docs.google.com/document/d/1IHS2dqtS316gUTybCBkI-fsUCVeCLDXa/edit?usp=sharing&oid=108401937589054410964&rtpof=true&sd=true 支援チームメンバーの紹介で活動支援対象者同士の情報交換が促進され、双方の活動に刺激を与えることができた。 また、活動支援に至る前の利用相談についても、管理チーム・支援チームが協力し細やかに対応することができた。 各企画の個別の内容については下記リンクに、実施概要・成果・課題・担当者の所感などをまとめた。 https://docs.google.com/spreadsheets/d/16U-hzPpJ0gI4xhgwI TRJS5c8-dfFbSPP/edit?usp=sharing&oid=108401937589054410964&rtpof=true&sd=true	・活動支援事業についての広報不足:相談を受けた全15件のうち、前年度のパートナー団体は4件。また美大関連が6件であった。	各企画の個別の内容については下記リンクに、実施概要・成果・課題・担当者の所感などをまとめた。 https://docs.google.com/spreadsheets/d/16U-hzPpJ0gI4xhgwI TRJS5c8-dfFbSPP/edit?usp=sharing&oid=108401937589054410964&rtpof=true&sd=true
秋田市文化創造館	指定管理	創造実験	キュレーション企画	キュレーション企画	・ミルハスとの連携 あきた芸術劇場ミルハスとの初めての本格的な事業協働の機会として、両館のハード面・ソフト面の特性を活かすことができた。 ・プレ事業からの講師/参加者との継続した関係性構築[コロナを経たパフォーマンスアートイベントの実施] 2020年度の文化創造館開館に向けて開催したプレ事業「みんなで乾杯の練習」のワークショップ企画「カンバイ! オルケスタ&デイ・ダンス・クリエイション」の講師と参加者の一部が、今回コロナ禍を経て初めて再集結することができた。 ・エリア一帯に対する表現の展開 館内だけでなく屋外でのパフォーマンスを行うことにより、近隣を往来する人たちがミルハスの利用者に向けてもアプローチすることができた。 ・空間や身体の新しい使い方の提示 WSの間中はスタジオA1にて美術・音楽・身体表現と複数の制作やリハーサルが行われ、一般の来館者がその様子を自由に見ることができるオープンスタジオのような状態になった。またスタジオA1や屋外エリアにて身体表現や大きな弾幕を持ち練り歩くなど、文化創造館の広く自由度の高い空間性を活かした試みであったと感じる。	・事前計画の段取り ミルハス連携イベントの実施が決まったのちに具体的に動き始めることとなり、企画構成/講師依頼/打ち合わせ/参加募集/広報/ミルハス側との調整等の準備時間を十分に取るができなかった。 ・講師予算の少なさ 準備の時間少なさ、ミルハス側の舞台スタッフと十分に交渉ができていなかった等の準備不足を講師の演出力、舞台技術力、ファシリテーション力等で補ってもらったこととなり、出演費のみの業務委託費に見合わない労働を強いることになってしまった。十分な準備ができない想定をあらかじめ持ち、出演者に求める業務に見合った委託費を捻出できるよう予算調整を図る必要があった。 ・実施体制 年度末進行にてスタッフが多くの業務を抱えている中でのイベント実施決定・企画内容決定だったため、コーディネーターの業務量コントロールがなされないままに進行することになってしまっていた。あらかじめ年度末の実施予定や業務分担を計画し、+αのイベント実施や連携相談にも対応できる余力を持った計画を行うべきだった。	【島】 「あっちこっちパレード」では文化創造館オープニングイベントの講師や参加者が再集合して、ミルハスと文化創造館とのつながりを強化するきっかけとなった。2023年度に招聘するAokid氏と事業を進める上でも、地元のアーティストや市民の方々とのつながりを意識しつつ、事業の展開を検討したい。 【藤本】 2023年度創造実験事業の準備として、以降の展開に期待感が持てるテーマやアーティスト選定・助成金採択に至ることができた。また年度末に実施が飛び込んできた「あっちこっちパレード」では、プレ事業からの文脈を引き継いだ連携やミルハスとの連携・関係性の構築、まちなかにひらいた展開を行うことができ、参加者や市職員からも「やってよかったイベント」という声や評価をいただける内容となった。一方で準備の不十分さ/講師・アーティスト・スタッフへの業務量のコントロールがなされないままに委託する/事業が進行するという危うさを重く受け止め、今後は改善し取り組んでいきたい。

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
				クリエイター・イン・レジデンス2022(白井仁美)	中心市街地の店舗との連携 まちなかで偶然展示を見てメイン会場に足を運ぶ人や、メイン会場でまちなかでもやっている事を知り、まちなかの店舗へ繰り出す方など、良い連鎖を生んでいた。まちなか会場でも、白井の作品と合わせてギャラリー(コラボラトリー)での展示を見たり、高砂堂でお菓子を買ったりという、連携会場それぞれの良さや楽しみ方を知ってもらえる良い機会となった。 アート作品を身近に感じてもらう仕掛け・親しみやすさ 一般市民より木製品提供を呼びかけて集まった原木(木製品)を作品にし、また持ち主の元に返す、という一連の流れに市民も当事者として関わりながら成果発表となる展覧会を実施。アートに苦手意識がある人や普段自主的に参加しない方にも積極的に接点を持ち、文化創造館のプログラムは誰もが接点を持つというPRを行った。「そうする？」4号で寄稿いただいた08COFFEEの児玉さんのコメントからも成果となる言葉の収集ができた。	・今回実施した内容を記録冊子にまとめたが、秋田に展示を見に来れない県外や海外にも広く取り組みを周知できると良い。	・今回のプロジェクトにおける作家にとってのチャレンジは、作家一人では成り立たない作品制作を目指しており、コーディネーターの役割やマネジメント力が問われると感じた。実際に、作家のプランを進める中で人とつなぐこと・文化創造館としてまちなかを回遊するための仕組みを取り入れることなど、こちらからの促しや要望もきちんと伝えるように進めていった。その中で、無理のないよいバランスで成果発表まで実施できたのは、作家のセンスと謙虚な姿勢が共感や協働、参画という行為に影響したのだと思う。
				クリエイター・イン・レジデンス2022(おおしまたくろう)	・すでに取り組んでいた「滑琴」が、地元スケーターからの助言もあり、秋田滞在によって3号機→5号機までアップデートされた。また、展示構成・設営にも協働相手が増えたことにより、おおしまのアイデアを妥協なく発揮することができた。1年の滞在が、クリエイター自身の活動がステップアップする機会になっていた。 ・おおしま自作のZINE配布や、これまでの活動をまとめた展示、滑琴の体験会を通年で行っていたこともあり、来館者におおしまと「滑琴」の存在を知らせ、1月のパフォーマンスに向けた気運を高めることができた。	・結果として映像記録を残すことができたが、クリエイター視点だけでなく「文化創造館として」何をどう残したいかという議論を、滞在初期から検討する必要があったように思う。	おおしまの活動に「余白」「余地」があるからこそ、音楽やストリートカルチャーなど関心もその深度も、年代も様々な人たちが、それぞれの解釈の仕方でおおしま・滑琴双方と独自の関係を作り上げていた。敷地内のスケボー問題と時期を同じくしていた滞在中は、彼らスケーターを巻き込むような期待も暗にしましたが、おおしまは「言うべきことは議論して、言えないことは作品にする」という態度を貫いた。おおしま自身が「ノイズ」となって、「音楽とは」「楽器とは」「ストリートとは」というすでにある考え方に揺さぶりをかけていたように思う。
秋田市文化創造館	指定管理	地域連携	芸術文化ゾーン活用研究会出席	芸術文化ゾーン活用研究会出席	適宜情報を交換することで芸術文化ゾーンに関わる方々に文化創造館について知っていただくきっかけをつくることができた。会議の終了後に個別に話中で今後の関わりしろを作るきっかけとなるのは今後も継続していきたい。	委員会への参加だけではすでに知っている情報等を共有するための時間となってしまい、費用対効果として見合っているか疑問。	今後は指定管理事業やPARKの地域連携の枠組みで、文化創造館の中だけでなく、よりまちに広がりが必要とする場面で協働できるポイントを見出していきたい。
				リサーチプログラム	中心市街地の店舗とのプログラム連携及び、あきた芸術劇場ミルハスとのイベントの協働企画、明德館図書館との連携ができたことは、地域連携を推進するにあたって大きな成果であった。	今後は明德館図書館など千秋公園エリア帯としてプログラム連携を図る。	当初「リサーチプログラム」として企画していたが、文化創造館の運営を進める中で、近隣施設との連携を強化するための催しを協働で実施する方が有意義な活用と考え、計画変更を行った。
秋田市文化創造館	指定管理	情報発信・アーカイブ	ウェブサイト	ウェブサイト	貸館含め、イベント情報を丁寧に掲載したことにより、ウェブアクセス数は年間を通じて昨年度より多くなっている。 また、ウェブサイトではないが、GoogleMapの情報を細かく更新することで館の様子を可視化し、評価の高い口コミも増えているように思う。	各情報だけではページビュー自体は増えないため、記事などでアクセス数を増やす工夫が必要。	ワードプレスなどシステムの更新などで画面が表示されなくなってしまったことがあるため、ウェブサイトの管理として、構築した谷さんに継続して管理等の依頼を行うことが安心と考える。
				情報紙	今年度よりA3裏表サイズからA2裏表に拡大し、写真を多く使うなどグラフィカルに目を引く内容となった。また紙質を薄くすることで印刷費も安く抑えることができた。 服部一成氏のデザインのおかげで、県外の文化施設等に配架された際にも強い印象を残すため、文化創造館にまだ来たことが無い人に対しても期待を膨らませることに大きく貢献している。		昨年度は横位置で構成していたが、今年度は縦位置で構成し、パンフレットスタンド等に配架された際に「文化創造館」のイベントカレンダーということが伝わりやすくなった。貸館利用件数の増加とともに掲載案件も増え、配りに行く先で「様々な活動が行われているね」と声をかけていただくことも多くなり、施設の活動の認知につながっている。 また、6月にミルハスがグランドオープンしてから館内に配架しているイベントカレンダーの減りが早くなり、人の流れの増加も感じた。部数の調整も行ったが、冬場は減らなくなるなどの傾向が見られ、残部が出ないよう調整することの難しさを感じている。
				SNS	SNS広告の利用もインプレッション数やフォロワー数に影響があったように思う。すべてのSNSでフォロワー数は増加しており、ツイッターはほぼ2倍となった。	投稿ルールを内部で共有した上で、各スタッフが担当事項を投稿するなど件数を増やしていきたい。	インスタグラムは週1~2回、ツイッターも高頻度で更新することにより、見てもらえる機会が多くなったと思う。 貸館利用者がフォローしてくれることも多い印象。
				記録	年間を通し坂口さんに依頼したこと、大学院生なため、カメラマンに通常委託するよりも安価で、なおかつアウトプットのイメージが一貫し、アニュアルレポートなどで写真のクオリティに差がつきにくくなった。事務作業の軽減にもつながった。 またこちらも要望を毎回伝えることにより、カメラマンとしての腕を成長させるきっかけにもなった。	学生で安価な分、あまりやりとりが無いとこちらの思うような写真をいただけなかったことがあったので、事前にどんなカットが必要か、イメージの共有は必要。	スピード納品のためにレタッチやセレクトを一部しないので納品はしていただいていたが、やはりクオリティが下がるため、セレクトいただくのはカメラマンとしての成長としても必要と考える。
				アニュアルレポート作成	単なる報告書としてではなく、文化創造館で日々起きていることや目的を写真を多く使用し、端的に様々な世代、関心を持っている方に伝えることができる冊子としてまとめることができた。文字を大きくすることで、高齢者にも読みやすいことを意識した。	年度末の繁忙期に入稿するため、印刷業者の繁忙期に重なり、納期の制限がかえられてしまった。そのため、来館者が多いフリーオープンデイに合わせて納品する予定だったが間に合うことができなかった。今後はスケジュールに余裕を持って進行したい。	写真を日々丁寧にまとめていたこともあり、創造館を多様な使い方をしている様子をバリエーション豊かに見せることができた。 事業評価のアンケートの内容が少し薄くなってしまったこともあり、次年度以降はもう少し何を見せるべき、伝えるべきかを事前に協議して細かいところまで充実した内容で編集できるよう意識したい。
				ブランディング	今年度はアサダワタルさん、森隆一郎さん、山本麻友美さんと文化施設で働いていた、フリーランスで活動することを並行して行う方の意識を共有する場として、充実した内容を録音することができた。	ラジオを公開するためのスケジュールが組めておらず、収録後に動いていないのは大きな反省点。今後はアウトプットまで含めてスムーズにできる方法を模索したい。	コロナが落ち着き、視察等が徐々に増えているため、現状では各担当者がスライド等を作成しているが、一元管理できるとよりスムーズにプレゼンテーションができるようになるのではと期待。

2022年度 事業報告書(成果・課題等)

定款	財源	分野	プログラム名	プロジェクト名	成果・実績	課題	担当者所感
⑨ その他 目的を達成するために必要な 事業	自主事業	広報	法人広報	法人ウェブサイトのマイナーチェンジ	2018年開設以来のウェブ改修だった。投稿日時調整、TOP記事の増設、TOPメニューの具体化、トグルメニュー表示などこれまでの不具合を解消したほか、アーツセンターあきたの基本情報の修正、文化創造館バナー追加、ロゴのアニメーション化、タグの自由選択などによってアーツセンターあきたの実態に即した内容に改修した。特にタグの自由選択やTOPメニュー表示の具体化によって、お知らせと記事がいっしょくたとなったこれまでの「分かりづらさ」をわずかながら解消できたのではないかと。また、5年間手付かずだったことで更新できないままであったプラグインや各ツールもわずかではあるが更新できたことで、扱いやすいはずのワードプレスの機能を投稿者が実感できる改修となった。	開設以来、改修に5年を要したが、制作会社と伴走しながら、予算内で可能な範囲を見極め、改修をその都度するよう計画を練るべきであったと思う。また、ウェブコーディングの知識が乏しいことで理解に時間を要したのは反省点である。ウェブ構築の知識をアーツセンター側がわずかでも持つことによって、話し合える改修計画はあったのではないかと。また、どのようにウェブを構築していくかだけでなく、更新していくこと、日々の業務にウェブ運営をしっかりと組み込んでいくことなどが課題として挙げられる。2018年当初のウェブ契約について担当者自身が把握できていなかったこと、今後どう	念願の改修ができたのはありがたかったが、構築・更新・運営についての課題を実感する機会でもあった。ある程度の知識と見通しを持つことで、今後の更新と運営に向き合わなければと思った。
				ウェブサイトのリニューアル準備	2022年度はウェブ会社の選定に始まり、秋田に拠点のひとつがありコーディング能力に長けているneccoにウェブ制作を依頼。煩雑になったアーツセンターあきたの法人としての機能や見せ方に助言をいただきながら、新ウェブサイト構築に向けて週1のZoom打ち合わせを続けた。何をどう見せるかのワイヤーフレームに時間をかけ、ウェブマガジンでありながらコーポレートサイトとしての役割を十分果たし、これまで取り組んできた各プロジェクトをTOPから見せられる仕様にしたことは現状のウェブサイトと大きく異なる構成である。まだ準備段階であり2023年度春公開に向けて実装を続け、微調整を重ねたい。	アーツセンターあきたの価値基準・行動指針をまとめ、方向性や機能、運営体制について事務局長が時間をかけて練り上げた。これをneccoと共有し、アーツセンターあきたをどう見せていくかをその都度話し合えたことは法人としての立ち方を決めるいい機会となったのではないかと。実際のウェブサイトの構成においては、コーポレートサイトの見せ方に加え、アーツセンターが関わるプロジェクトや大学事業紹介などをいっしょくたにしたウェブマガジンの構築は、今後運用してから課題が出てくるだろうと考えている。	進行管理に関しては、neccoの阿部さん・夏井さんの動き方・動かし方に助けられた。週1回のZoomミーティングでは、ウェブサイト構築の手順だけでなく合理性・明確な指示、スケジューリングなど参考になることが多かった。ただ若いスタッフがほとんどのためかデザインは30代までのビジュアルイメージのように思え、アーツセンター側と少し隔たりがあったように思う。その問題点を早めに掴み、デザインイメージのすり合わせに時間をかけていたらと反省している。
				「200年をたがやす」図録販売	Amazonにおいて図録の販売に着手し、今後他の刊行物の販売の際にも活用できる運用ルール等を整備した。	Amazonでの販売開始について周知徹底しておらず、売り上げは目標値を達成できなかった。	
	自主事業	広報	ART JOB FAIR出展	-	これまで20回近く求人を行ってきたが、ウェブサイトやハローワーク、秋田県関連の就職フェア(オンライン開催)や各種求人媒体への情報掲載では、情報の発信が一方通行で、発信された情報にヒットする人のみが応募する状況であったため、期待する人材の応募確保に苦慮してきた。今回のART JOB FAIRはアート業界に興味のある人に的を絞ったジョブフェアであること、来場者とコミュニケーションをとることができるために、ヒット率がこれまで試したどの媒体よりも高い印象である。また地方の新設のアート系NPOであることから認知度も低い中で、実際の活動に関わる資料を展示しながら紹介することで、強く興味を示す人が多数いたことも成果であったと思う。	ネックとしては、やはり移住を前提とした求人に対して高いハードルを感じている人が多いこと、アートプロジェクトの現場に関わることを志望する人が多いところにある。他の出展団体からも、恒常的に管理系の人材が不足している声も聞かれ、そういった人材の発掘という点においては、まだまだ課題が大きいと推察する。	